

沙流川水系の流域及び河川の概要 (案)

平成17年9月22日

国土交通省 河川局

目 次

1. 流域の自然状況	1-1
1-1 河川・流域の概況	1-1
1-2 地 形	1-3
1-3 地 質	1-4
1-4 気候・気象	1-5
2. 流域及び河川の自然環境	2-1
2-1 流域の自然環境	2-1
2-2 河川の自然環境	2-5
2-3 特徴的な河川景観や文化財等	2-8
2-4 市民活動	2-11
2-5 自然公園等の指定状況	2-12
3. 流域の社会状況	3-1
3-1 人 口	3-1
3-2 土地利用	3-2
3-3 産業・経済	3-3
3-4 交 通	3-6
3-5 関係ある法令等の指定状況	3-7
4. 水害と治水事業の沿革	4-1
4-1 既往洪水の概要	4-1
4-2 主な洪水の概要	4-2
4-3 治水事業の沿革	4-8
5. 水利用の現状	5-1
5-1 水利用の変遷	5-1
5-2 渇水被害及び渇水調整	5-2
6. 河川流況及び水質	6-1
6-1 河川流況	6-1
6-2 河川水質	6-4
7. 河川空間の現状	7-1
7-1 河川敷等の利用の状況	7-1
7-2 河川の利用状況	7-3
8. 河道特性	8-1
9. 河川管理の現状	9-1
9-1 河川管理施設	9-1
9-2 砂利採取	9-1
9-3 水防体制	9-2
9-4 危機管理への取り組み	9-3
9-5 地域との連携	9-5

1. 流域の自然状況

1-1 河川・流域の概況

沙流川^{さる}は、その源を北海道沙流郡日高町^{ひだか}日高山脈に発し、千呂露川^{ちろろ}等を合わせ、日高町市街部に出て更に溪谷を流下して平取町^{びらとり}に入り、額平川^{ぬかびら}等を合わせ、門別町^{もんべつ}において太平洋に注ぐ、幹川流路延長 104km、流域面積 1,350km²の一級河川である。

その流域は、日高町、平取町、門別町の 3 町からなり、流域の土地利用は、山地等が約 88%、水田、畑等の農地が約 6%、宅地等の市街地、その他が約 6%となっている。流域内は林産資源などに恵まれ、下流では農耕地として明治初期からひらけ水田、牧畜等が営まれ、近年は全国有数の軽種馬の産地として、沿岸漁業とともに、北海道日高地方西部における社会・経済・文化の基盤をなすとともに、多様な自然環境を有していることから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

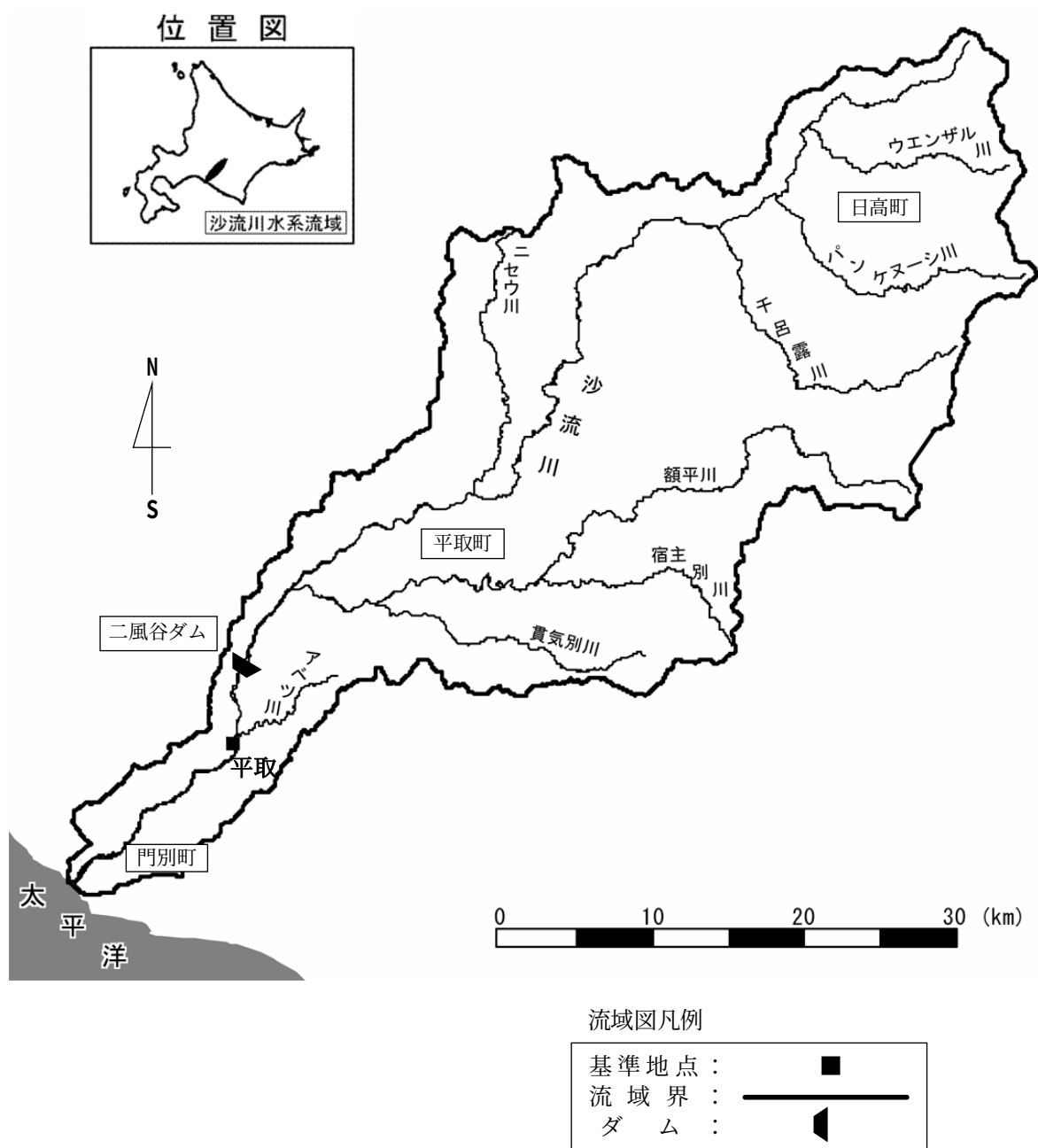


図 1-1 沙流川水系流域図

表 1-1 沙流川流域の概要

項 目	諸 元	備 考
流路延長	104km	
流域面積	1,350km ²	
流域市町村	3 町	日高町、平取町、門別町
流域内人口	約 1.5 万人	平成 7 年河川現況調査
河川数	28	

1-2 地 形

流域の地形は、東は北海道の脊梁をなす日高山脈の 2,000m 級の山が連なり、北及び西は 1,000m 級の山で連なった分水嶺を持っている。流域の形状はほぼ南西～北東にのび、流域平均幅は約 13km と細長い形状になっている。最上流部の日高山脈は山腹斜面は急峻で、中流部はおおよそ標高 200～400m の範囲にあり、山腹斜面はやや緩やかになるとともに、河岸段丘の発達が顕著である。下流部は、標高 100m 以下となり、山腹斜面はさらに緩くなるとともに、河岸段丘もさらに広く発達し、平取本町から下流部には沖積平野の発達もみられる。

沙流川の上流部では、急峻な峰々を連ねた日高山系および輝緑凝灰岩から成る竜門峡のような渓谷と清流から成る景観が連続し、河床は岩盤等で構成されている。

岩知志ダムから二風谷ダムの中流部では、上流部に比べ流れは穏やかで、河岸段丘の発達が顕著であり、河川に沿って農地と国道が連続する。河道は、河床堆積土砂も多くなり瀬や淵がみられるようになる。

二風谷ダムから下流では右岸主体に堤防が続き、周辺では軽種馬や飼育牛の放牧および野菜栽培などが行われ、牧歌的な田園風景が広がり、良好な自然環境とともに魅力あふれる流域景観資源となっている。河道は、河床部が堆積砂礫からなり、瀬と淵が連続する。

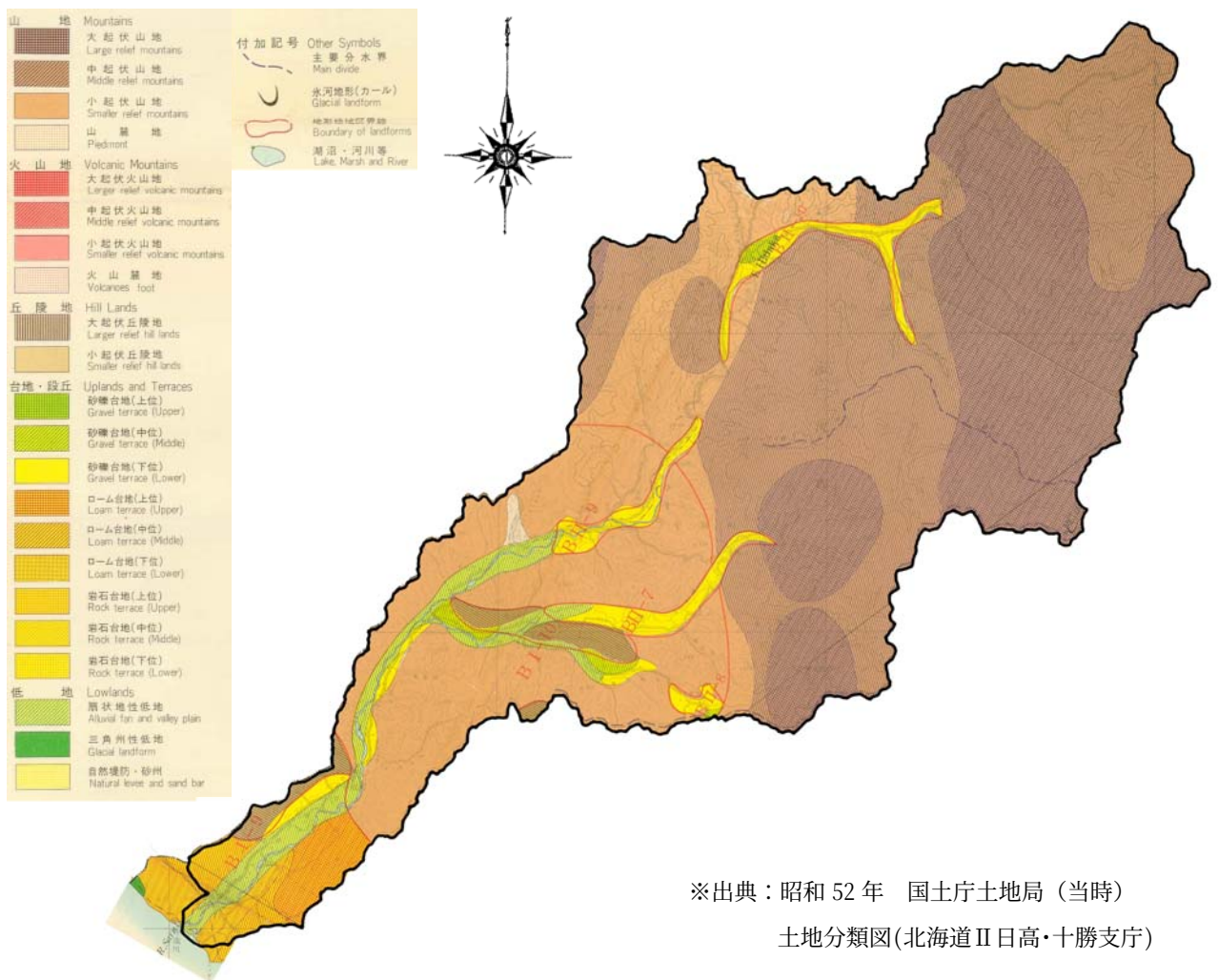


図 1-2 沙流川地形分類図

1-3 地 質

流域の地質は、上流部の山間部から下流部の平地部へ順次、白亜紀の砂岩・泥岩や凝灰岩等から第四紀の沖積層・洪積層により構成されている。なお、最上流の日高山脈には、日高変成帯が分布する。

日高変成帯は、ハンレイ岩、カンラン岩等の深成岩類および結晶片岩、片麻岩等の変成岩類からなる。古生層である先白亜紀の黒色粘板岩・砂岩のなかに珪質岩・輝緑凝灰岩を介在または互層する日高累層群、白亜紀の砂岩・泥岩を主とする蝦夷層群、輝緑凝灰岩を主に珪質岩・粘板岩等を含む空知層群が分布し、特に振内北部は蛇紋岩体(貫入岩)が分布する。振内付近より下流では、砂岩・泥岩互層を主とする川端層や滝の上層等の新第三紀層が分布する。河口付近には砂・砂礫からなる第四紀層が分布する。

地表は一般に砂礫を混入した砂土壌や植生で覆われているが、川に面する急傾斜地では基岩の露出している箇所が多い。下流部においては、土砂の堆積等で土壌も厚く、表層には火山灰が5～20cm程度堆積している。

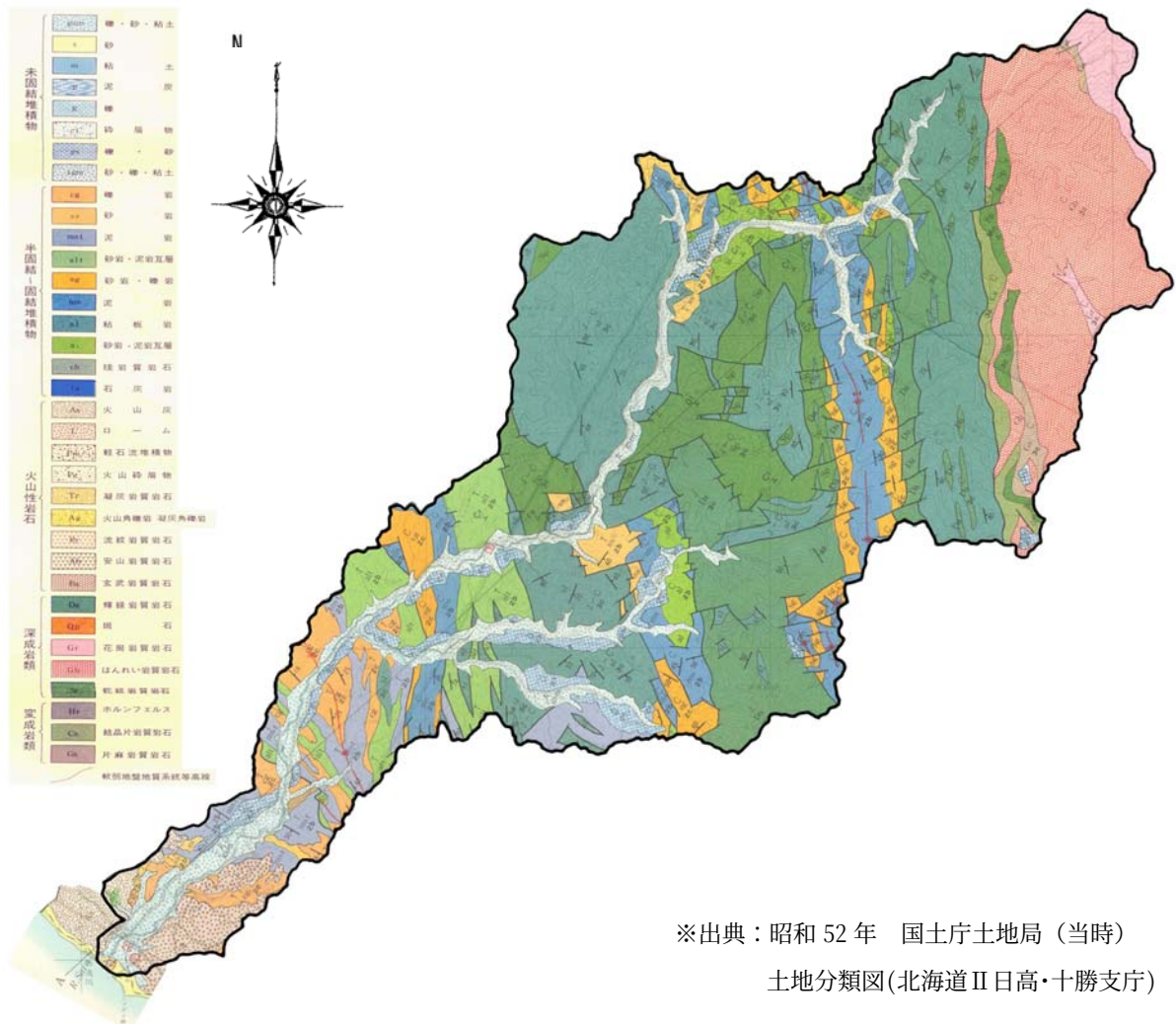


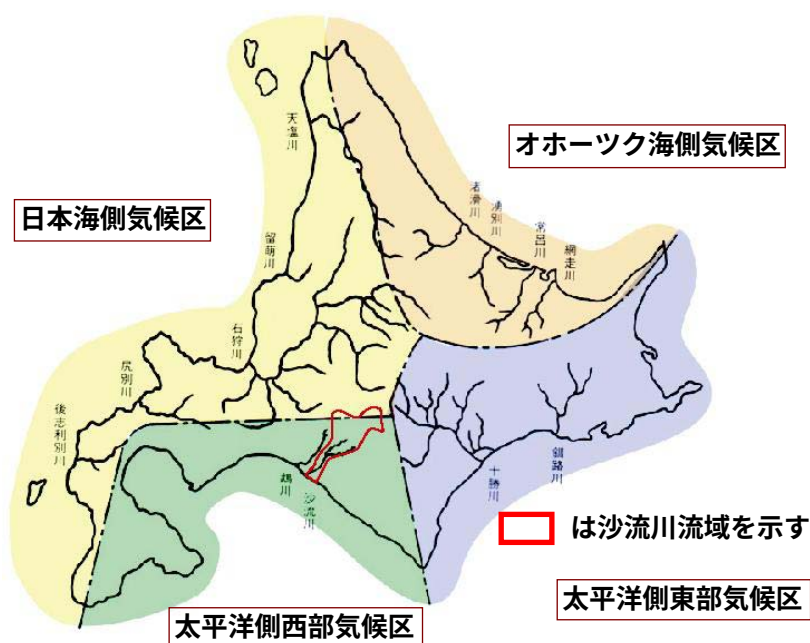
図 1-3 沙流川表層地質図

1-4 氣候・氣象

沙流川流域は、太平洋側西部気候区(表日本型)に属し、太平洋岸から内陸へ約 80km の南北方向にやや細長い形状の地域である。

海岸部(門別町)の夏は、沿岸を南下する親潮の影響で、あまり昇温せず海霧を伴う冷涼な日が続く。また冬は、シベリア大陸からの影響が弱いため、積雪量の少ない比較的穏やかな気候となり晴天の日が多い。

年平均気温は日高門別で 7.3℃であるが内陸にはいるにしたがい標高が高くなるため低下し、日高では 5.9℃である。年平均降水量は、日高門別で 1,003mm、日高 1,410mm である。日高は内陸的で 8 月の最高月平均気温は 22.7℃、1 月の最低月平均気温は -10.7℃と寒暖の差が大きい。降雨も台風や低気圧の影響を受け、8 月には 200mm/月を越える。日高門別では、海岸性で気温差も少ない。8 月の最高月平均気温は 22.9℃、1 月の最低月平均気温は -7.9℃である。降雨は 7～9 月が 120～190mm/月と多いが、これ以外の月は概ね 100mm/月以下である。



※出典：「北海道の気候」を基に作成

图 1-4 气候区分图

表 1-2 各氣象觀測值

	日高	日高門別	北海道平均
平均気温(℃)	5.9	7.3	7.7
最高気温(℃)	31.5	28.3	30.0
最低気温(℃)	-22.2	-18.8	-15.8
平均風速(m/s)	1.4	2.5	3.8
最大風速(m/s)	7.7	13.0	18.1
日照時間(hr)	1,176	1,673	1,632
降水量(mm)	1,410	1,003	1,191

※出典：気象庁ホームページ「電子閲覧室」による
統計期間（1995年～2004年）

表 1-3 月別平均気温・降水量

	日 高		日高門別	
	月平均気温 ℃	月降水量 mm	月平均気温 ℃	月降水量 mm
1月	-8.2	62	-5.4	39
2月	-7.3	43	-4.6	21
3月	-2.7	89	-0.2	38
4月	4.5	94	5.5	59
5月	10.8	138	10.4	111
6月	15.1	68	14.2	76
7月	19.3	159	18.6	150
8月	19.4	241	19.8	186
9月	15.1	170	16.9	118
10月	8.4	136	10.8	89
11月	1.5	131	4.1	77
12月	-5.4	70	-2.7	40

表 1-4 年平均気温・年降水量

	日 高		日高門別	
	年平均気温 ℃	年降水量 mm	年平均気温 ℃	年降水量 mm
1995年	6.2	1,518	7.5	1,187
1996年	5.3	1,342	6.7	956
1997年	6.0	1,611	7.5	1,092
1998年	6.0	1,431	7.2	1,117
1999年	6.3	欠測	7.8	950
2000年	5.9	1,607	7.4	1,050
2001年	5.1	1,422	6.4	926
2002年	6.0	1,063	7.3	845
2003年	5.7	1,405	7.0	979
2004年	6.5	1,289	8.0	930
平均	5.9	1,410	7.3	1,003

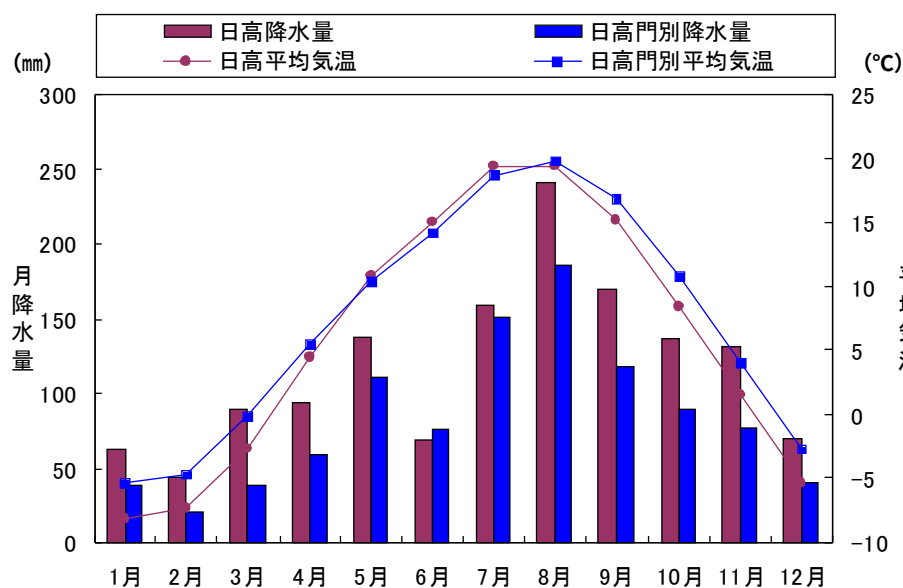


図 1-5 月別降水量・気温

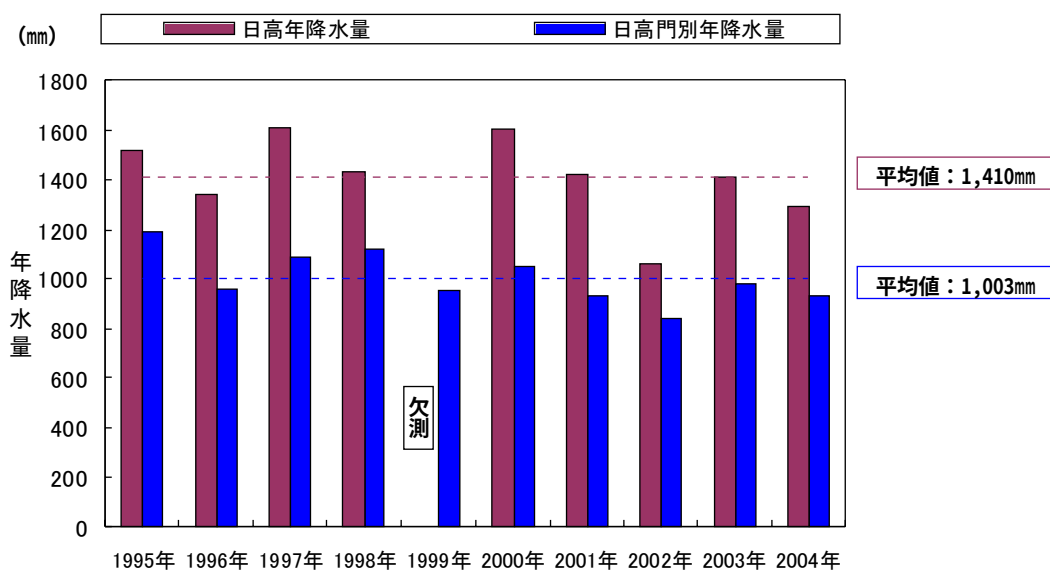


図 1-6 年降水量

※出典：気象庁ホームページ「電子閲覧室」による
統計期間（1995年～2004年）

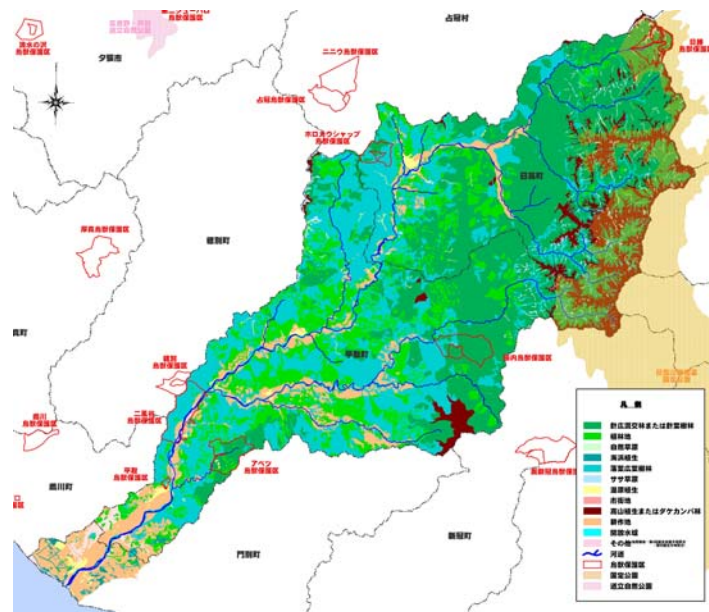
2. 流域及び河川の自然環境

2-1 流域の自然環境

流域の植生は、流域面積の約 83%を占める森林植生に代表され、その分布は、高山帯、亜寒帯・亜高山帯、ブナクラス域自然植生及び代償植生に区分される。標高約 1,000m 以上は高山帯となり、高山低木群落等が分布する。亜寒帯・亜高山帯植生は、これらの群落の下部にあり、標高約 500m ～1,000m 程度までの間にエゾマツ-トドマツ群落等が分布する。このうち、日勝峠付近のエゾマツ-トドマツ群落は、「沙流川源流原始林」として天然記念物に指定されている。標高約 500m 以下は、温帯、低山帯で、ブナクラス域自然植生のエゾイタヤ-シナノキ群落や、河川沿いのヤナギ低木群落等が分布する。さらに、上流から下流にかけて、カラマツを主体とする人工林が広く分布する。

河川周辺の植生は、上流は川幅も狭く、水際まで樹林地が近接し、中・下流では川幅が広がる。中・下流の堤内地は段丘が発達し、水田、畑地、牧草地等として利用されている。

流域に生息する動物としては、哺乳類ではキタキツネ、エゾシカ等が上流から下流にかけて広く分布する。鳥類は上流でアカショウビン、カワガラス等溪流や溪畔林に多い種がみられ、中・下流ではアオジ、カワラヒワ等ひらけた河川沿いに多い種やアオサギ、マガモ等水面を利用する種もみられる。両生類・爬虫類では、エゾサンショウウオ、エゾアカガエル等水辺から草原・樹林地を行き来する種が生息し、昆虫類では、上流の高山帯に特別天然記念物のダイセツタカネヒカゲ等希少な種が生息する。中・下流では、アオゴミムシ等の河川沿いの環境で多くみられる種が生息している。魚類では、上流でオショロコマが、中・下流では、ギンブナ、ウグイ、フクドジョウ、イバラトミヨ等がみられ、サクラマス等が遡上するほか、北海道の太平洋沿岸のみに分布し北海道レッドデータブックの地域個体群に指定されているシシャモが遡上する。



※出典：現存植生図(第 5 回自然環境保全基礎調査)を基に作成

図 2-1 流域の植生図

【植物】

流域の植生は、上流域が山地林及び溪畔林を主体とする樹林地で、エゾマツ-トドマツ群落やエゾイタヤ-シナノキ群落等の自然林が分布する。これらの樹林地は、河川の水際付近まで分布し、林床植物はクマイザサ等が優占する。

中流域には山地斜面に分布する広葉樹を主体とする樹林地、段丘上に分布する畑地、牧草地等の耕作地及び人工林、河川沿いに分布するヤナギ等河畔林と水際の草原植生が分布する。山地斜面の広葉樹はミズナラ-エゾイタヤ林とカラマツ等人工林が多く、右岸では水際近くまで分布している。林床はミヤコザサ等が優占する。段丘上の耕作地の多くは牧草地で、イネ科牧草の牧草地が広がっている。河川沿いのヤナギ林は、支流の合流部付近などの砂州上や水面より 1～2m 高い河川沿い低地にみられ、オノエヤナギ等を主体とする高さ 10m 程度の高木林のほか、水際にはタチヤナギを主体とする低木林もみられる。草原としては、砂州上に成立した草本群落が主で、ツルヨシ、クサヨシ、シロバナシナガワハギ等が優占する。

下流域は、流域のほとんどが水田や牧草地で、河川敷地内に比較的自然性の高い環境が分布している。樹林地としては、段丘斜面に立地するミズナラ等の広葉樹林から、河川敷地内の比較的高い箇所にみられるヤナギ、ケヤマハンノキによる高木林、水際の低木林と、その標高や氾濫頻度により群落の高さが異なる。ヤナギ林はオノエヤナギが優占し、林床は比較的まばらでアキタブキ等がみられる。ヤナギ低木林は、水際まで成育しており、ときには沈水する。

高水敷は、本来ヤナギ林が成立できる標高で牧草地として利用されている箇所が多くみられ、その水際側にヤナギ林、ヤナギ低木林等の樹林地や乾性の草原が立地し、さらに湿地や後背水域または支流との合流部周辺にはヨシ、ツルヨシ群落等の抽水植物群落が分布する。

また、河道内には砂州等の自然裸地が多く分布し、ツルヨシ群落やヤナギ低木林が立地するほか、河口部においては海辺の砂丘地に多い草本群落もみられる。

重要種としては、ベニバナヤマシャクヤク、クロビイタヤ等が確認されている。

【哺乳類】

沙流川流域は、森林が多く、日高山脈とも連絡することから、エゾヤチネズミ、エゾアカネズミ、キタキツネ、エゾシカ等が生息する。このうち、エゾヤチネズミ、エゾシカ、キタキツネは中・下流の河川沿いで多く確認されており、主要な生息地の一部であると考えられる。

重要種としては、カラフトアカネズミが生息する。

【鳥類】

沙流川流域は、上流でアカショウビン、カワガラス等山地や溪流に多い鳥類がみられる。

中・下流は、水田、畑地、牧草地等の土地利用がすすんでいるため、主に河川近傍の水田や畑地等において生息するムクドリ等が頻繁にみられる。

中流の山地の樹林ではエナガ、ハシブトガラが、中～下流の河川沿い樹林でアオジ、カワラヒワ等が、河川沿いの草原ではヒバリ、ノビタキ、ホオアカ等が、中州等砂礫地

ではコチドリ等の繁殖が確認されている。また、水面や抽水植物群落は、アオサギ、マガモ等の水鳥が餌場等として利用している。

重要種としては、クマタカ、ハヤブサ、クマゲラ等が生息する。

【両生類・爬虫類】

両生類・爬虫類としては、エゾサンショウウオ、エゾアカガエル等が生息している。このうちエゾアカガエルは、卵塊が中～下流の後背水域や樋門排水合流部等流れの緩い箇所を確認されており、これらが本種の主要な生息地であることが考えられる。

重要種としては、エゾサンショウウオの生息が確認されている。

【昆虫類】

特別天然記念物に指定されているダイセツタカネヒカゲ等稀種の生息が上流域の高山帯で多く報告されている。中・下流域では、アオゴミムシ等河原や水域と関連が深い種がみられるほか、樹林地に多いエゾマイマイカブリ等が生息している。

重要種としては、ケマダラカミキリ等が確認されている。

【魚類】

上流は溪流で、その河床は主に岩盤であり、オショロコマ、ハナカジカ等が生息する。中・下流部は、上流に比べると緩やかで、河床は砂利も多くなり、瀬と淵が分布している。淵ではコイ、キンブナ、ウグイなど、瀬では、フクドジョウなどが生息する。樋門排水の合流部や合流部付近の流れの緩い箇所、砂州沿いのヨシやツルヨシ群落(水際部)等の抽水植物群落あるいは沈水したヤナギ低木林には、ウグイ類の稚魚やイバラトミヨが生息する。

また、サクラマス等が遡上するほか、下流部の細礫・粗砂の河床はシシャモの産卵床となっている。

重要種としては、スナヤツメ、ウナギ等が確認されている。

【底生動物】

上流部では、ヒメヒラタカゲロウ等清冽で流れが速い環境でみられる種が確認されている。中・下流部では、平瀬においてエルモンヒラタカゲロウ、アカマダラカゲロウ、キタシマトビケラ等が多く確認され、早瀬においてキタシマトビケラ、コガタシマトビケラ等が多く確認された。淵では、ヒラマキミズマイマイ、スジエビ、クシゲマダラカゲロウ等が生息する。ワンド、抽水植物、沈水したヤナギ低木林等流れの緩い箇所では、ヒラマキミズマイマイ、シマイシビル等が生息する。



写真 2-1 サクラマス(ヤマメ)

※写真出典:北海道開発局



写真 2-2 シシャモ

※写真提供:鵜川町

2-2 河川の自然環境

1) 上流部

最上流部の河床は岩盤が主で谷底は狭く、樹林が水際まで分布する。やや下流になると、段丘地形がみられ、河相は溪流で、岩盤等で構成され、溪谷等が形成されている。

植生は、山付部の河岸や隣接地にエゾマツ-トドマツ群落、エゾイタヤ-シナノキ群落及び針広混交林等がみられ、哺乳類はキタキツネ、ヒグマ、エゾシカ等が生息し、鳥類では、クマタカ、オオタカ、ハイタカをはじめアカショウビン、カワガラス等山地の樹林や溪流に生息する種がみられる。両生類・爬虫類ではエゾサンショウウオが、昆虫類では、高山帯においてダイセツタカネヒカゲ等希少な蝶類が生息している。魚類ではサクラマスが遡上するほかオショロコマ、ハナカジカ等が生息している。底生動物ではヒメヒラタカゲロウ等流れが速く清冽な環境でみられる種が確認されている。



写真 2-3 沙流川上流部

※写真出典:北海道開発局

2) 中流部

中流部は、河岸段丘が発達し、上流部に比べ河床勾配も緩やかになり、流れが穏やかで河床堆積砂利も多くなり瀬と淵が見られるようになる。

周辺植生は、段丘上の平地が畑地、牧草地、水田として利用されているほか、山地斜面にはミズナラ林やカラマツ植林が分布する。河道内の植生は、水際まで斜面のミズナラ・エゾイタヤ林が分布するほか、砂州や水面より 1～2m 高い河川沿い低地にオノエヤナギ、タチヤナギ等からなるヤナギ林やヤナギ低木林が分布し、一部はときに沈水する。このほか、砂州上にはクサヨシ、シロバナシナガワハギ等からなる草本群落がみられる。哺乳類ではキタキツネ、エゾシカ等が生息し、鳥類では、オオタカ、ハヤブサをはじめ、樹林でエナガ等が、草原ではホオジロが、河川等水域ではカワセミ、カワアイサが生息している。両生類・爬虫類では、エゾサンショウウオ、エゾアカガエル等が林縁部や沢地等で確認されている。昆虫類では、河川周辺に多くみられるアオゴミムシのほか、樹林地に多いエゾマイマイカブリ等もみられる。魚類では、ダム湖でコイやギンブナが、河川ではフクドジョウ、イバラトミヨ等が生息し、サクラマス等が遡上する。底生動物ではヒメヒラタカゲロウ、ヒゲナガカワトビケラ等が生息している。



写真 2-4 沙流川中流部

※写真出典:北海道開発局

3) 下流部

下流は高位段丘がみられ、右岸側主体に堤防が続き、河口付近は扇状地形で両岸に堤防が設けられている。河床部は、河床堆積砂利が多くなり瀬と淵が連続する。周辺の段丘面は水田、畑地、牧草地として利用されており、自然性の高い植生は、河道付近に多くみられる。

高水敷は、採草地、放牧地として利用されており、その河道側にヤナギ高木林、低木林等の樹林地やオオイタドリ、オギ等の乾性の草地が分布し、さらに湿地や後背水域または支流との合流部周辺や樋門排水周辺にはヨシ、ツルヨシ群落等の抽水植物群落が分布する。また、これらの湿地、樹林及び水際に隣接して砂州等の自然裸地が多く分布し、ツルヨシやヤナギ低木林が立地するほか、河口部においては海辺の砂丘地に多い草本群落もみられる。

哺乳類ではエゾヤチネズミ、カラフトアカネズミ、キタキツネ、エゾシカ等が生息し、鳥類では、オオタカ、ハイタカをはじめ、河川沿い樹林でアオジ等が、河川沿いの草原ではヒバリ、ノビタキ等が、中州等砂礫地ではコチドリ等の繁殖が確認されている。また、水面や抽水植物群落は、アオサギ、マガモ等の水鳥が餌場等として利用している。両生類・爬虫類では、エゾアカガエルの成体や卵塊が、後背水域や樋門排水合流部等流れの緩い箇所を確認されており、これらが本種の主要な生息地であることが考えられる。昆虫類ではアオゴミムシ等河原や水域と関連が深い種がみられるほか、樹林地に多いエゾマイマイカブリ等が生息している。魚類は、淵ではコイ、キンブナなど、瀬では、カワヤツメ、ウキゴリなどが生息するほか、ワンド、樋門排水の合流部やその緩流域、抽水植物群落あるいは沈水したヤナギ低木林には、ウグイ類の稚魚やイバラトミヨが生息する。また細礫・粗砂の河床はシシャモの産卵床となっている。底生動物は、平瀬においてエルモンヒラタカゲロウ、キタシマトビケラ等が多く確認され、早瀬でもキタシマトビケラ等が多く確認された。淵やワンド、抽水植物、沈水したヤナギ低木林等流れの緩い箇所では、ヒラマキミズマイマイ等が生息する。



写真 2-5 沙流川下流部

※写真出典:北海道開発局

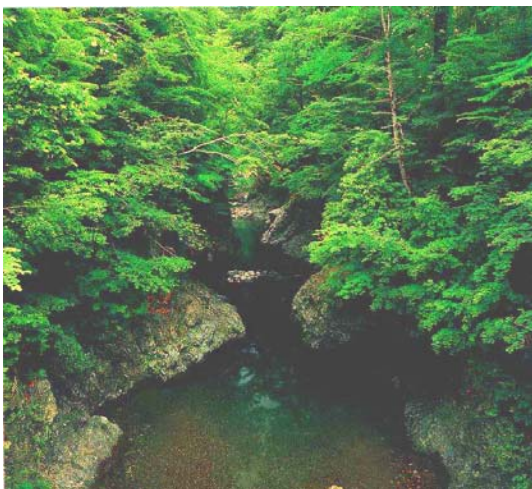
2-3 特徴的な河川景観や文化財等

(1) 景観・景勝地

中・上流部は、渓谷地形と両側を覆う森林美、幌尻岳、チロロ岳、貫気別山の山岳景勝地などの自然景観と二風谷ダムにより創出された湖景観で構成される。特に、沙流川源流原始林は、日高山脈襟裳国定公園の一部で天然記念物に指定されており、このほか幌尻岳の七ッ沼カール、紅葉や深緑の中を落ちるサンゴの滝、チロロ峡の峡谷、美しい絵画を思わせる轟ガロウ、切り立った断崖が続く日高竜門、深緑の中水音を響かせる仁世宇ガロウ、スズランの群生地などが有名である。

にぶたに湖の右岸には、アイヌの人々の伝説にもなっているオプシヌプリ(穴があいている山)があり、夏至の日の夕方にはオプシヌプリの穴に太陽が沈む光景が見られる。

中・下流部は、朝霧に浮かぶ遠くの山々を背景に牧歌的な田園風景が広がり、このほか市街地の街並み、河口の海岸景観、親水性に富んだ水際空間などで構成される。



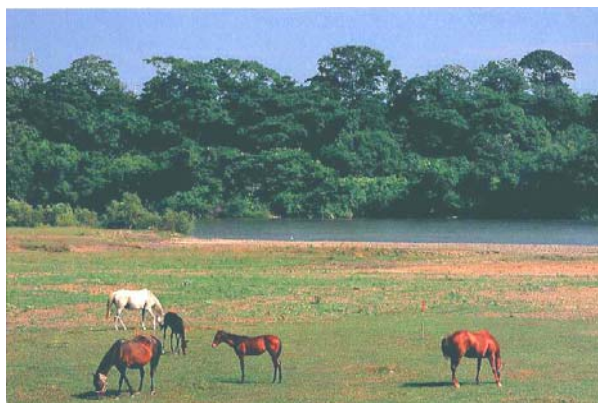
日高町
緑の回廊・千呂露峡



平取町
スズランの群生地



平取町
オプシヌプリ



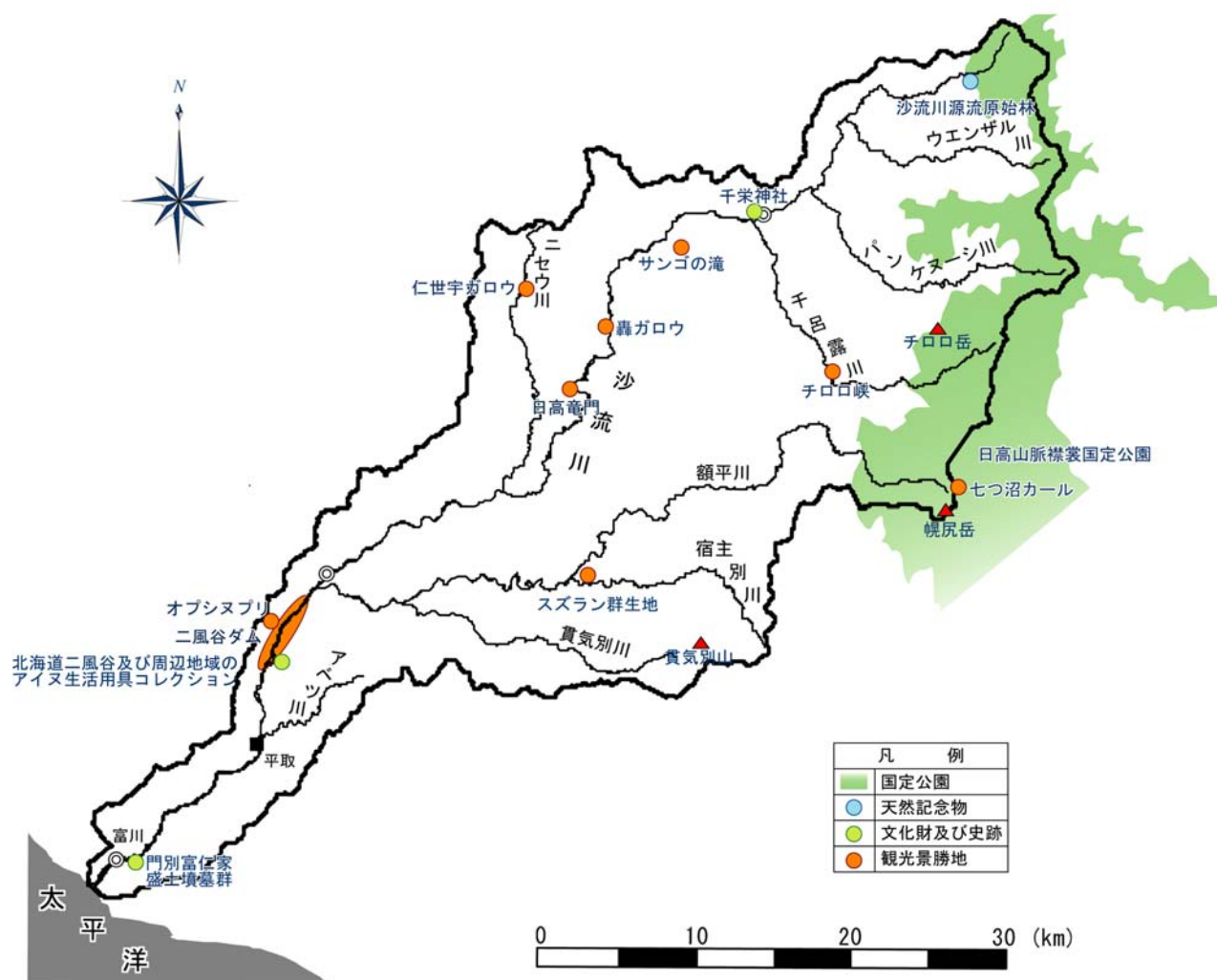
門別町
優駿の里
※写真出典:北海道開発局

(2) 文化財及び史跡

表 2-1 沙流川流域の指定文化財の現況

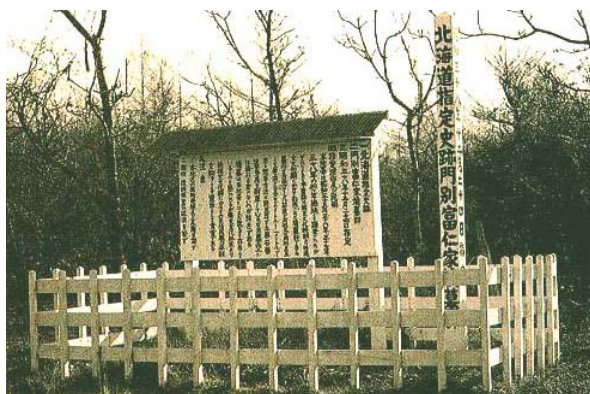
種類	名 称	所在及び指定年月日	概 要
国 指 定	【天然記念物】 沙流川源流原始林	日高町 昭和 45 年 12 月 4 日	日高町市街地から上流側へ 30km 程の区間の沙流川両岸一帯のトドマツ、エゾマツを主としたダケカンバ等の樹林地帯であり、北海道冷湿帯上部の代表的な原生林とされている。また、エゾシカ、ナキウサギ等の動物の生息が確認されている。
	【重要有形民族文化財】 北海道二風谷及び周辺地域の アイヌ生活用具コレクション	平取町 平成 14 年 2 月 12 日	萱野茂氏が二風谷を中心に収集された資料で、由来が比較的明確であり、生活用具が諸分野の全般にわたって網羅的に収集されており、伝統的な暮らしの全容や地域の特徴を知ることができる。
	【重要無形民族文化財】 アイヌ古式舞踊	平取町 昭和 59 年 1 月 29 日	北海道一円に居住しているアイヌの人々により伝承されている芸能で、祭祀の祝宴等、様々な行事の際に踊られるアイヌ独自の振興を根ざす歌舞で、その様式は極めて古能をとどめ、芸術的な価値が非常に高いものとされている
道 指 定	【史跡】 門別富仁家盛土墳墓群	門別町 昭和 38 年 12 月 24 日	門別町市街地より西北に約 40km 離れた標高約 50m の段丘上にある墳墓群で、縄文晩期より続縄文の文化期にかけて形成されたものである。墳墓の直径は 1 m 程度の円または楕円形をしており、深さは 0.5～1 m 程度であり、その時代の先住民族らの葬制を知る上で非常に重要なものである。
町 指 定	【有形文化財】 千栄神社「本宮」	日高町 平成元年 6 月 14 日	大正 10 年、住民の浄財と奉仕により建築された。一間社流れ告様式による日高唯一の本格的木造社寺建築物。
	【無形文化財】 ユーカラ (英雄叙情詩) カムイユーカラ (神謡) ウェペケレ (民謡)	平取町 昭和 59 年 4 月 17 日	アイヌ民族無形文化財の中で、古くから伝承されてきた極めて価値の高い文化遺産であり、これを守り後世へ語り継ぐことを目的に町指定し、合わせて保持者を確認する。保持者故西島てる、故木村きみ、故黒川きよ、故川上まつ子。

※出典： 沙流川水系河川環境管理基本計画 基本資料
北海道市町村勢要覧 (平成 15 年)
日高教育局ホームページ



※出典：沙流川河川環境マップをもとに作成

図 2-2 観光景勝地等位置図



富仁家墳墓群・北海道指定史跡(門別町史)



沙流川源流原始林

※写真出典：鶴川沙流川治水史

2-4 市民活動

近年、多くの市民団体等の活動が盛んに行われるようになってきている。こうした状況を背景として、沙流川流域においても、「沙流川愛クラブ」によるごみ拾い、植樹活動等が行われ積極的に参加する人々が増えている。また、「二風谷ダム流域治山・治水連絡協議会」が主催する「自分でできる森づくり」においても植樹活動等が行われており、環境教育を通して身近な自然を学ぶ活動が着目されている。



沙流川と共生する町づくり講演会



自分でできる森づくりの植樹活動

※写真出典:北海道開発局室蘭開発建設部

2-5 自然公園等の指定状況

沙流川流域は、自然環境に恵まれた地域は数多く存在しており、これらを保護、保全、管理することにより、後世に残し伝えていくうえで指定されている。

沙流川水系の自然公園等の法令指定状況は、以下のとおりである。

(1) 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律に基づく鳥獣保護区

1) 指定理由:森林鳥獣生息地の保護区

名称:日勝	沙流郡日高町所在	877ha	平成 2.10.1～平成 22.9.30
名称:アベツ	沙流郡平取町所在	967ha	平成 15.3.31～平成 34.9.30
名称:二風谷	沙流郡平取町所在	1,296ha	平成 9.10.1～平成 19.9.30
名称:穂別	勇払郡穂別町所在	447ha	平成 15.3.31～平成 34.9.30
名称:ホロカウシャップ	沙流郡日高町所在	562ha	平成 15.3.31～平成 34.9.30
名称:振内	沙流郡平取町所在	1,172ha	平成 15.3.31～平成 34.9.30

出典：平成 16 年度鳥獣保護区等位置図

2) 指定理由:身近な鳥獣生息地の保護区

名称:平取	沙流郡平取町所在	55ha	平成 13.10.1～平成 23.9.30
-------	----------	------	-----------------------

出典：平成 16 年度鳥獣保護区等位置図

(2) 国指定天然記念物

名称:沙流川源流原始林

日高市街から、東北東に約 30km の地点の両側一帯に位置する。トドマツ、エゾマツを主とし、ダケカンバ等も交える。北海道の冷温帯上部の代表的原生林。エゾシカ、ナキウサギも生息している。

(3) 国定公園

名称:日高山脈襟裳国定公園

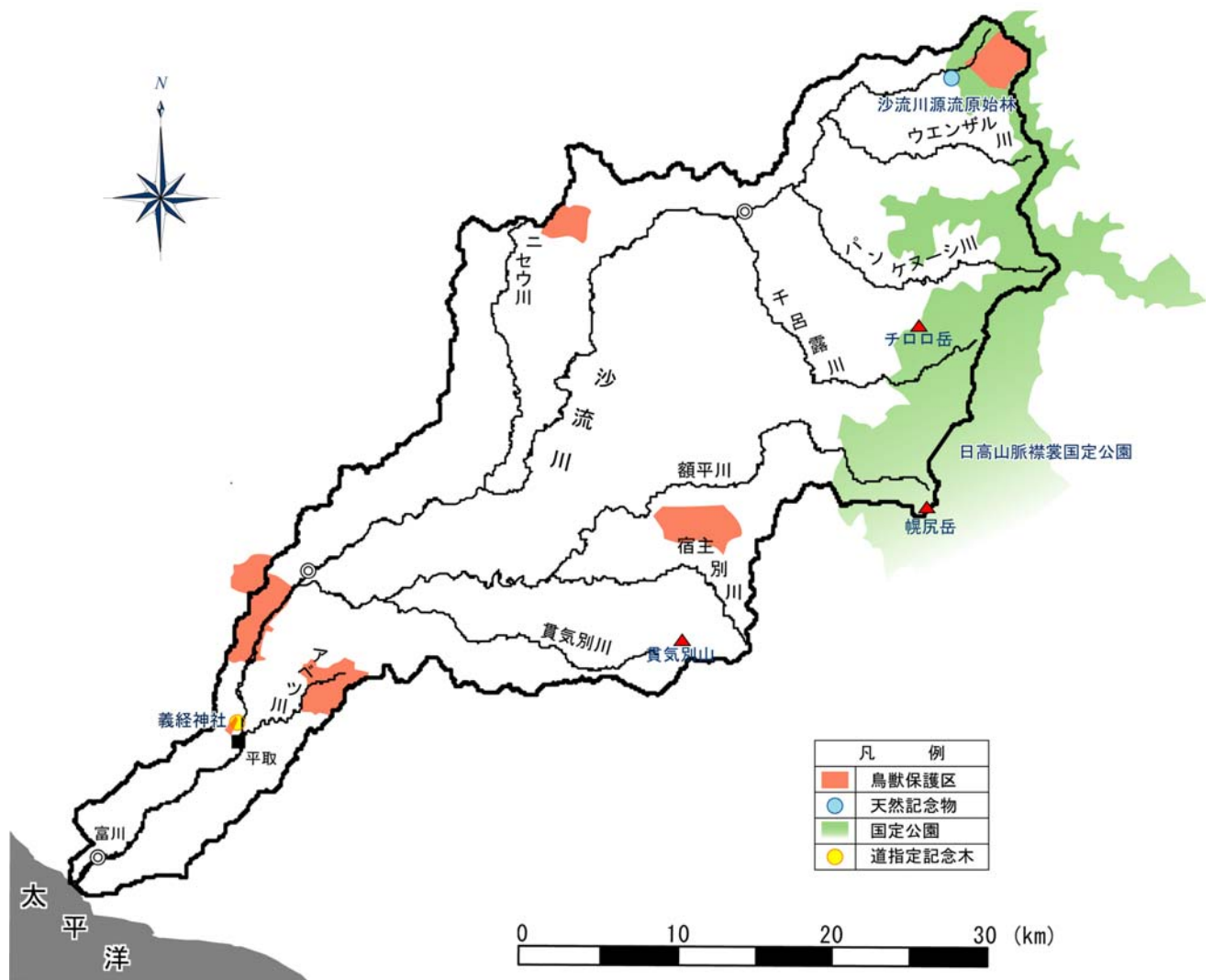
日高山脈襟裳国定公園(昭和 56 年 10 月 1 日)は、北海道中南部の標高 1,500～2,000m 級の峻険な褶曲山脈である日高山脈と襟裳岬一帯の面積約 103,447ha の範囲で、高山植物や発達した針葉樹林及びダケカンバ林等自然性の高い植生が分布し、エゾヒグマ、エゾナキウサギ、高山チョウのカラフトルリシジミ等多くの野生動物が生息している。

(4) 道指定 記念保護樹木

義経神社の栗

信仰対象の有無:信仰対象あり。

保護制度指定:自然環境保全地域



※出典：平成 16 年度鳥獣保護区位置図をもとに作成

図 2-3 自然公園等の指定状況

3. 流域の社会状況

3-1 人 口

流域内は、門別町の一部、平取町、日高町の3町で構成され、流域面積は1,350km²である。

流域の中心集落は沙流川本流(国道237号)沿いに立地し、このうち下流部門別町富川市街が流域内では最も大きな規模を有し、また日高西部一円の拠点ともなっている。

表 3-1 流域内人口

区 分	3町合計	日高町	平取町	門別町	流域内
面 積 (km ²)	1,736	564	743	429	1,350
総 人 口 (人)	22,286	2,306	6,503	13,477	15,365
世 帯 数 (世帯)	9,138	1,045	2,551	5,542	6,067
人 口 密 度 (人/km ²)	12.8	4.1	8.8	31.4	11.4

※ 流域内の集計は河川現況調査(平成7年度)による

※ 各町の集計は北海道市町村勢要覧(H15)による、人口はH12国勢調査人口を採用

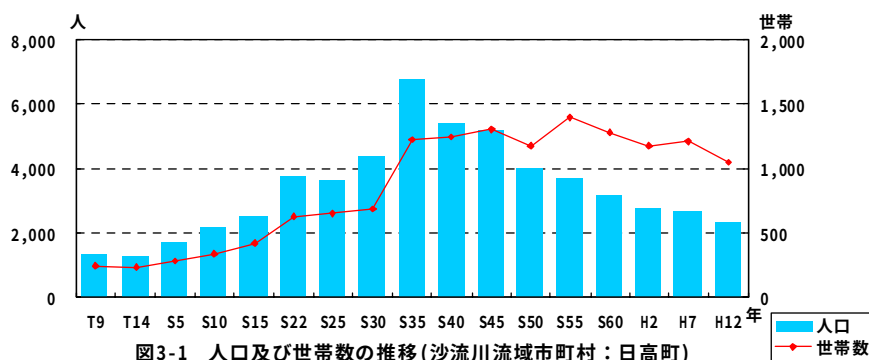


図3-1 人口及び世帯数の推移(沙流川流域市町村：日高町)

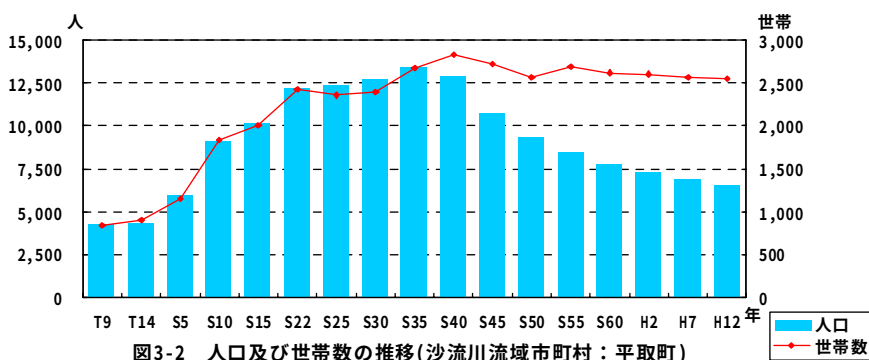


図3-2 人口及び世帯数の推移(沙流川流域市町村：平取町)

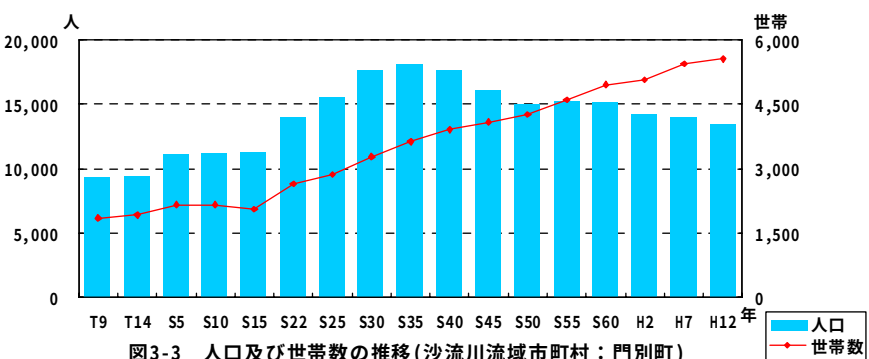


図3-3 人口及び世帯数の推移(沙流川流域市町村：門別町)

※出典:北海道市町村勢要覧による

3-2 土地利用

沙流川流域における土地利用の特徴は、その地形条件を反映して山林の占める割合が非常に高いことである。

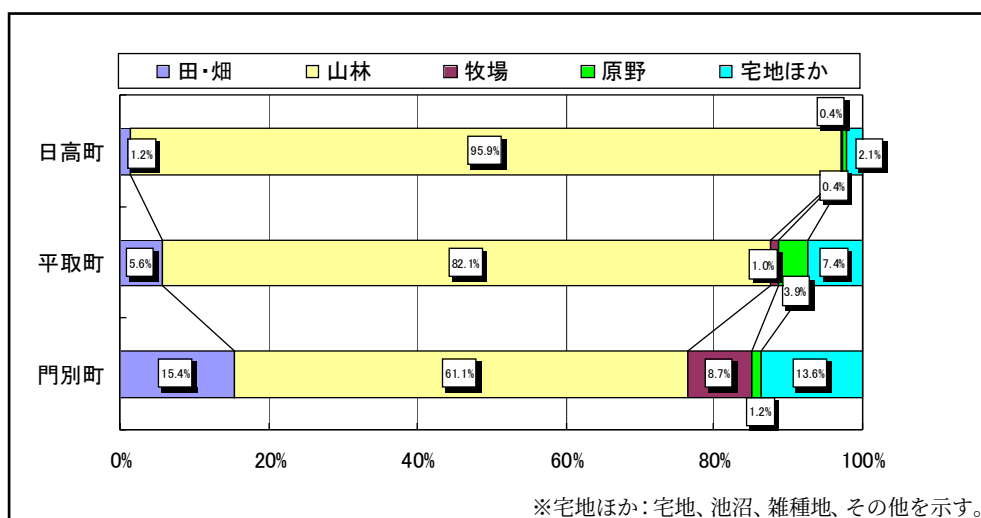
平野部の主な利用は、平取町においては、田、畑、門別町では、田畑のほか牧場に利用されている。

表 3-2 日高町、平取町、門別町における土地利用状況

(単位: km²)

区 分	田	畑	宅地	池沼	山林	牧場	原野	雑種地	その他
日 高 町	3.44	3.08	1.19	0.08	541.09	2.27	1.99	2.91	7.91
平 取 町	20.35	21.40	2.85	0.10	609.95	7.32	29.20	5.14	46.86
門 別 町	13.41	52.49	6.48	—	262.16	37.27	5.26	4.40	47.26

※出典:北海道市町村勢要覧(H15)による



(単位: km²)

区分	全流域	山地	耕地	市街地	その他
平成7年	1,338.1 (100.0%)	1,178.1 (88.0%)	73.0 (5.5%)	1.9 (0.1%)	85.1 (6.4%)

図 3-4 流域内土地利用状況

※出典:河川現況調査による

3-3 産業・経済

沙流川の最上流部に位置する日高町の町勢は、戦後に鉄道や道路の整備等により拡大し、農業と豊かな森林資源を背景に林業や林産加工業等を中心として発展した。近年はこの農林業人口が減少しているが、国道の整備による商店街近代化や豊かな自然環境を生かした観光関連産業に力が注がれている。

平取町、門別町を支える第一次産業の就業者は全就業者の3割を占め、その大半が農業従事者である。作付面積は水稻、牧草が大半を占めるが、近年では水稻にかわりトマト、きゅうり、軟白長ネギなどの割合も増加している。特に平取町におけるトマトの収穫量は、北海道全体の約20%を占めて全道一を誇り、全国的にみても市町村別順位で三位となり、平取町農業の中核を担う作物として、今後も規模拡大を目指している。

林業は、平取町、日高町は面積の80%以上が森林であることから、これらの豊かな森林資源を活かした生産力の向上が図られている。特に、平取町は私有林面積の占める割合が多い。

畜産は日高支庁管内の軽種馬生産が全国生産頭数の約80%を占めるが、その中でも門別町の軽種馬生産は日高支庁管内の約25%を占めている。門別町では、この軽種馬関連産業をまちづくりに生かすべき重要な要素として位置づけている。また、平取町では肉用牛、豚、門別町では乳用牛の生産も多く、これらは地域の特産品にもなっている。

沙流川はサケ・マスが遡上するほか、北海道の太平洋沿岸のみに分布する日本固有の魚であるシシャモが秋から冬の産卵期に遡上する。このシシャモは門別町を代表する特産品の一つとなっており、その漁獲量は日高管内の約60%を占めている。

表 3-3 日高町、平取町、門別町における産業別就業者数

区 分	日高町		平取町		門別町		3町合計	
	人口 (人)	構成比 (%)	人口 (人)	構成比 (%)	人口 (人)	構成比 (%)	人口 (人)	構成比 (%)
第1次産業	128	10.2%	1,087	31.7%	2,535	34.3%	3,750	31.1%
第2次産業	250	20.0%	701	20.4%	1,245	16.9%	2,196	18.2%
第3次産業	873	69.8%	1,644	47.9%	3,603	48.8%	6,120	50.7%
計	1,251	100.0%	3,432	100.0%	7,383	100.0%	12,066	100.0%

※出典：北海道市町村勢要覧(H15)による

表 3-4 日高町、平取町、門別町における製造品出荷額、農業粗生産額および漁獲高

(単位:千万円)

区分	日高町	平取町	門別町	3町合計
製造品出荷額	94	96	1,387	1,577
農業粗生産額	28	579	1,128	1,735
漁獲高	—	—	86	86

※ 北海道市町村勢要覧(H15)による、平成 13 年集計値

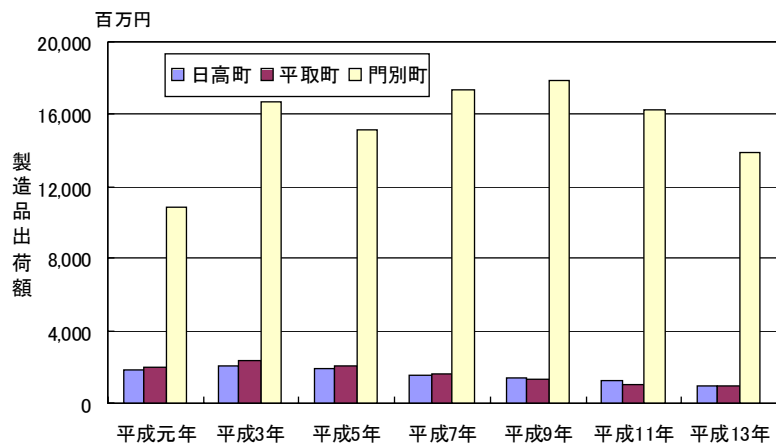


図 3-5 日高町、平取町、門別町における製造品出荷額

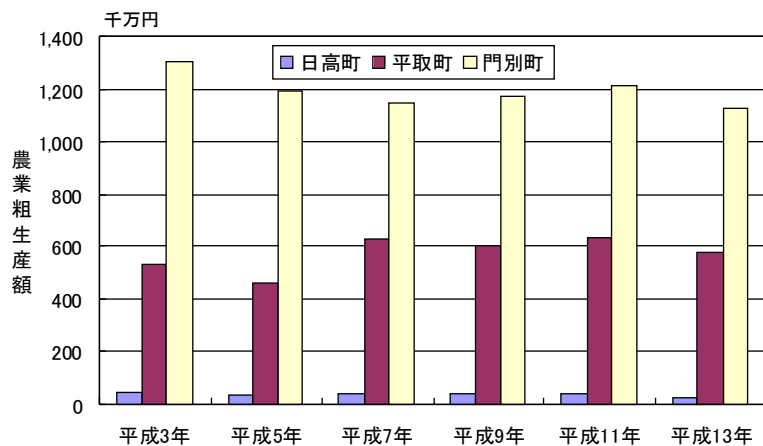


図 3-6 日高町、平取町、門別町における農業粗生産額

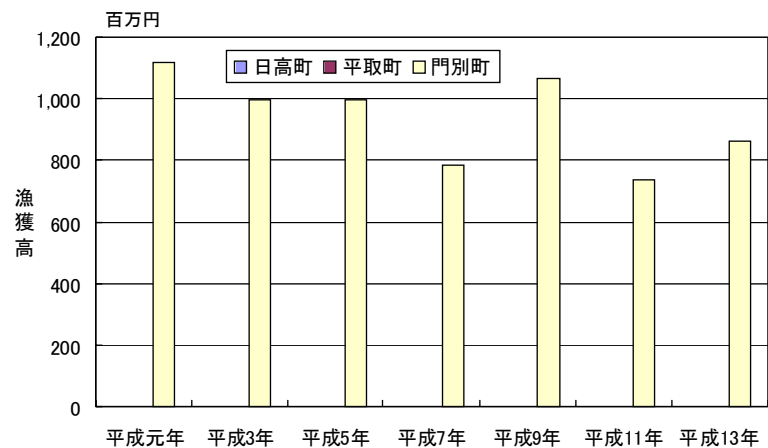


図 3-7 日高町、平取町、門別町における漁獲高

表 3-5 日高町、平取町、門別町における森林面積

(単位:ha)

区 分	日高町	平取町	門別町	3町合計
国有林	50,731	41,895	9,788	102,414
市町村有林	1,336	3,430	4,196	8,962
その他民有林	1,755	17,927	13,851	33,533
合計	53,822	63,252	27,835	144,909

※ 北海道市町村勢要覧(H15)による、平成 14 年集計値

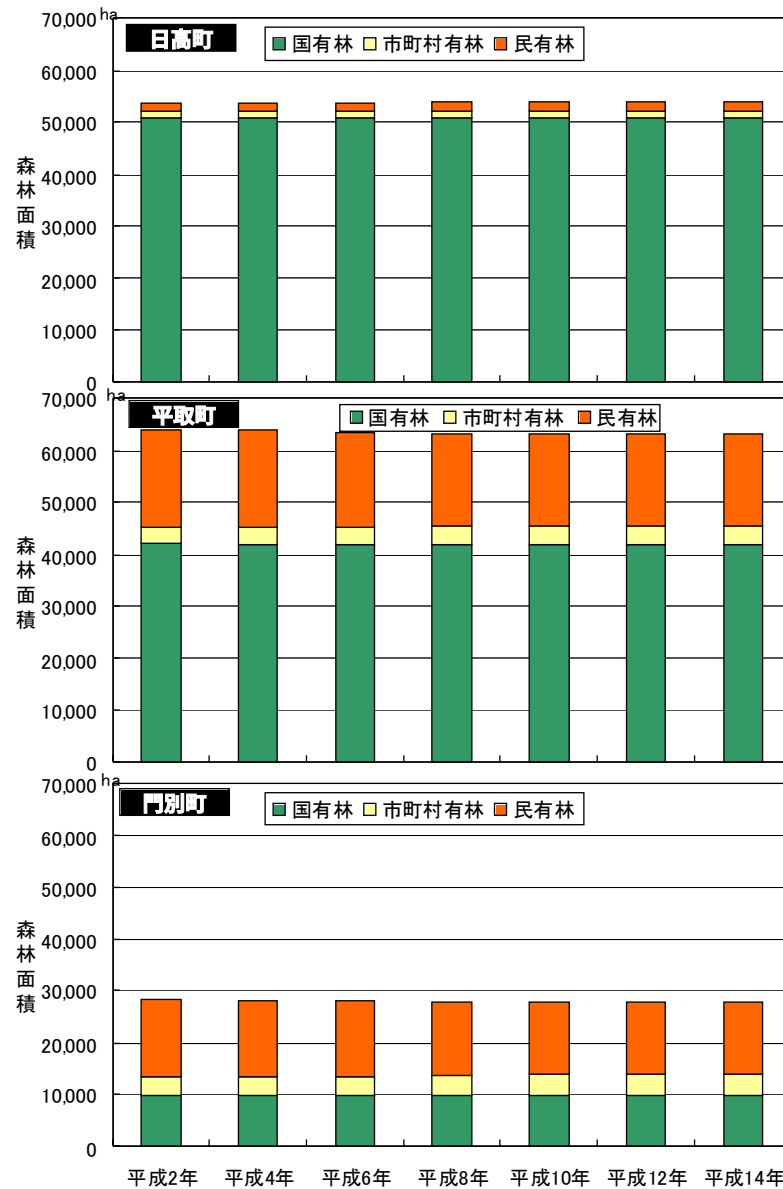


図 3-8 日高町、平取町、門別町における森林面積

表 3-6 日高町、平取町、門別町における家畜頭数

(単位:頭)

	日高町	平取町	門別町	3町合計
乳用牛	148	1,848	4,732	6,728
肉用牛	437	2,545	2,090	5,072
農用馬	18	42	26	86
軽種馬	9	465	3,049	3,523
豚	0	3197	0	3197

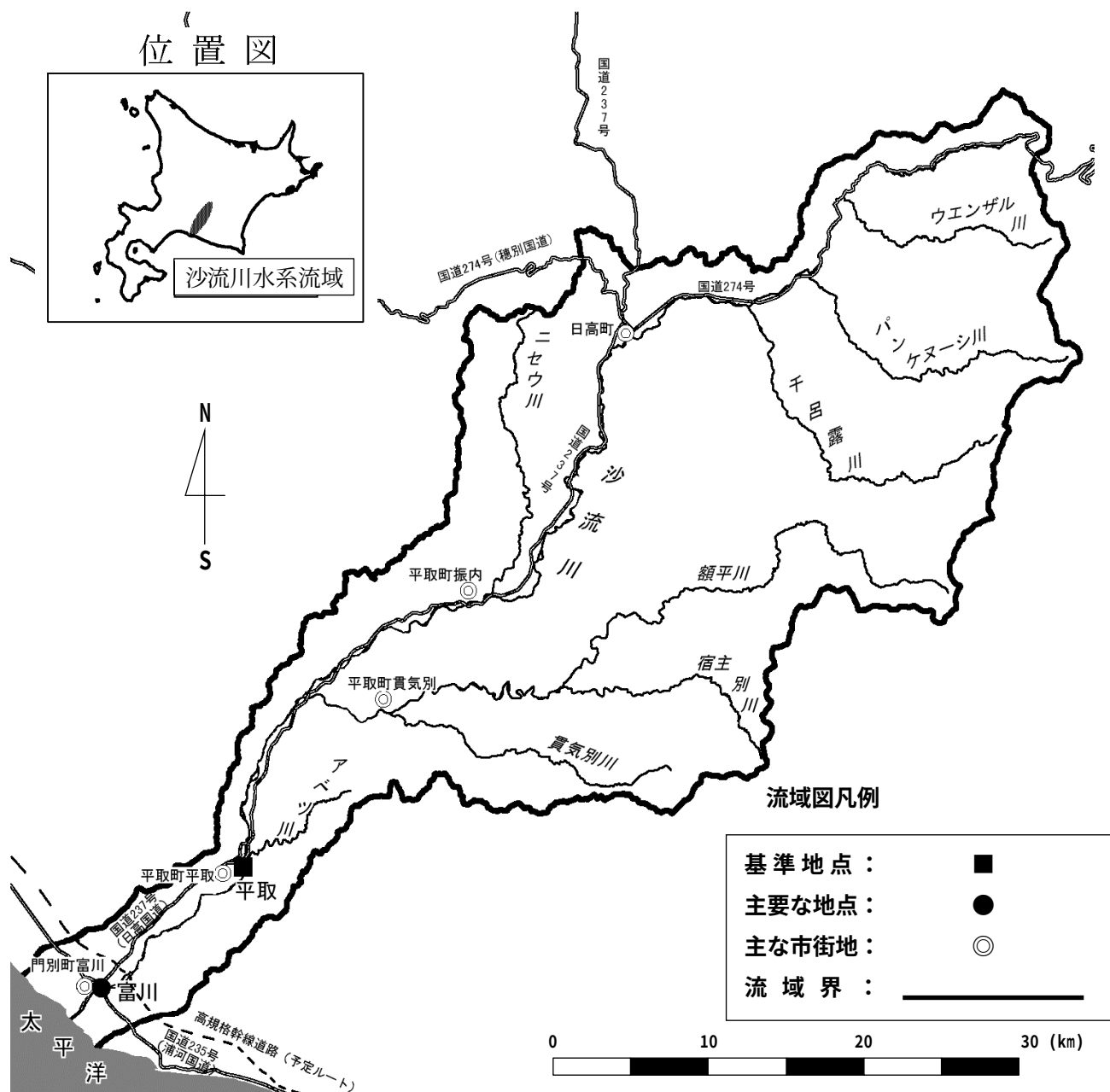
※北海道市町村勢要覧(H15)による、平成 12 年集計値

3-4 交 通

沙流川流域内には、国道3路線(235号、237号、274号)が走り、道央、道東、道南を結ぶ幹線機能を有している。特に、道央札幌、千歳、苫小牧と道東十勝地区との連絡ルートとして重要で、産業流通および生活交通ルートとして利用されている。

また、高規格幹線自動車道を構成する日高自動車道の整備が進められ、今後流域を横断する予定であることから地域の発展が期待される。

一方、鉄道については苫小牧～門別～様似町を結ぶJR日高本線がほぼ海岸沿いに走り、幹線である室蘭本線と接続している。

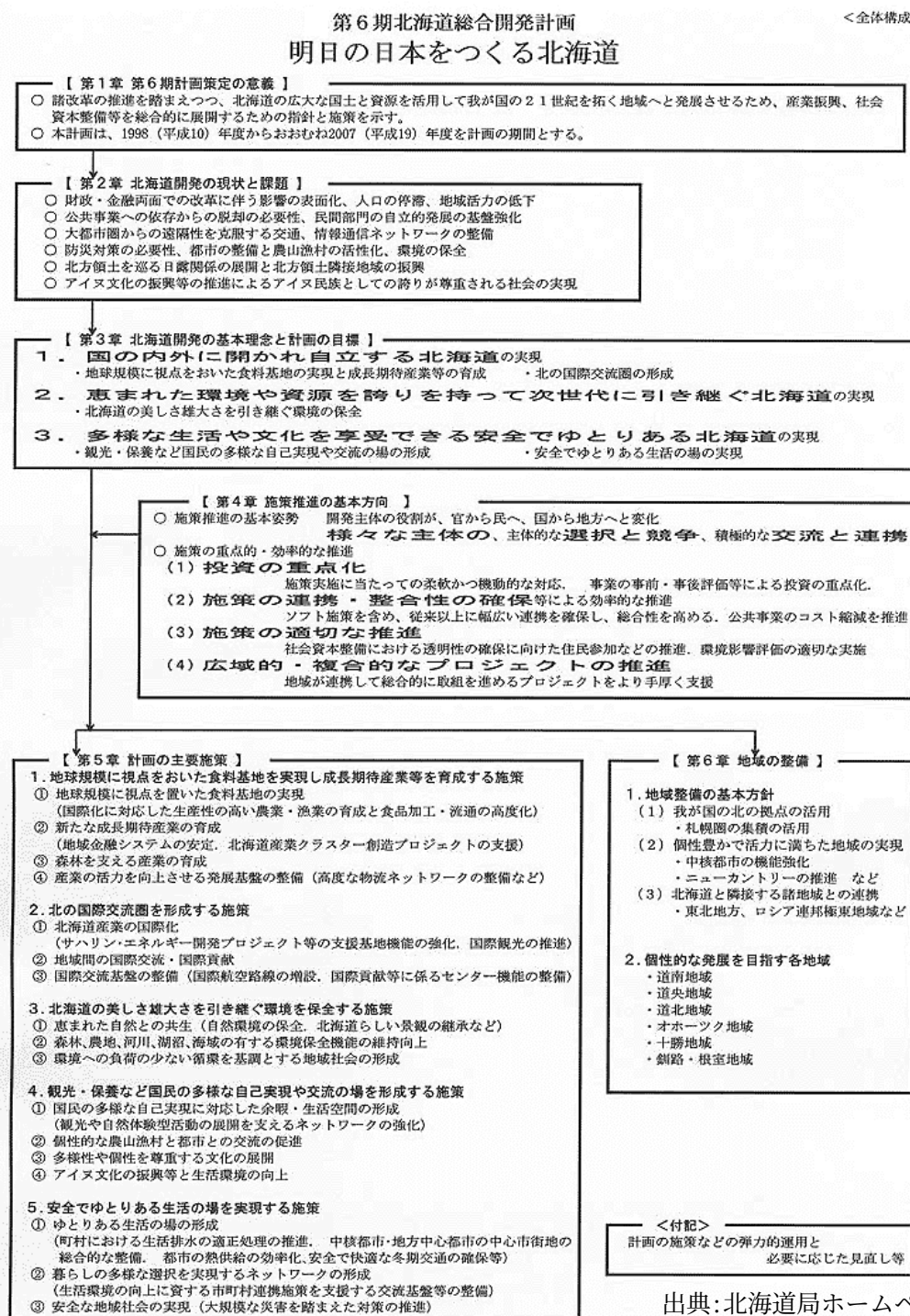


3-5 関係ある法令等の指定状況

(1) 第6期北海道総合開発計画

北海道総合開発計画は、行政改革や国際化、地球環境問題への知見の集積などの大きな情勢の変化を受け、地球規模に視点を置いた食料基地、北の国際交流圏の形成、観光・保養基地の形成や北海道が有する美しく雄大な自然環境の保全、安全でゆとりのある生活環境の創造を目的としている。

これらの目的を重点的・効率的に推進してゆくための一方針として広域的・複合的な地域プロジェクトの推進を掲げており、複数の市町村が連携を図り、総合的に取り組むプロジェクトを支援してゆくものとしている。この地域プロジェクトの中には、沙流川水系に関連するものもある。



(2) 地域プロジェクト及び都市計画

沙流川流域に関連する地域プロジェクトは「日高町手づくりリゾート整備事業（日高町）」、「サーモンパーク整備事業（門別町）」があり、広域プロジェクトとして「鶴川・沙流川ペアライン構想（鶴川町、穂別町、日高町、平取町、門別町、占冠村）」がある。

また、沙流川流域内では門別町で都市計画区域が指定されている。

表 3-7 沙流川流域に関連する地域プロジェクト

区分	プロジェクト名	概 要
地域プロジェクト	日高町手づくりリゾート整備事業 (日高町)	恵まれた自然を背景に、平成元年４月に北海道富良野・大雪リゾート地域の重点整備地区の指定を受け、通過型から滞在型のリゾート施設の整備を図り、地域の活性化、雇用の拡大及び地域経済の活性化を促進する。
	サーモンパーク整備事業 (門別町)	全国的な清流である「一級河川沙流川」の河川敷と福満川支流を利用し、豊かな自然や地域性を生かしてサケの遡上する姿の鑑賞や手で触れてみるなどの体験ができる施設を整備する。
広域プロジェクト	鵠川・沙流川ベアライン構想 (鵠川町・穂別町・日高町・平取町・門別町・占冠村)	鵠川・沙流川の２本の川の流れ（ベア・ライン）に沿って、流域の環境保全と有効活用を図るとともに、地域が個性的なまちづくりを進め、相互連携による多様性に富んだ表情豊かな流域圏の形成を目指す。

※ 出典：胆振・日高地域プロジェクトマップ(北海道開発局)による

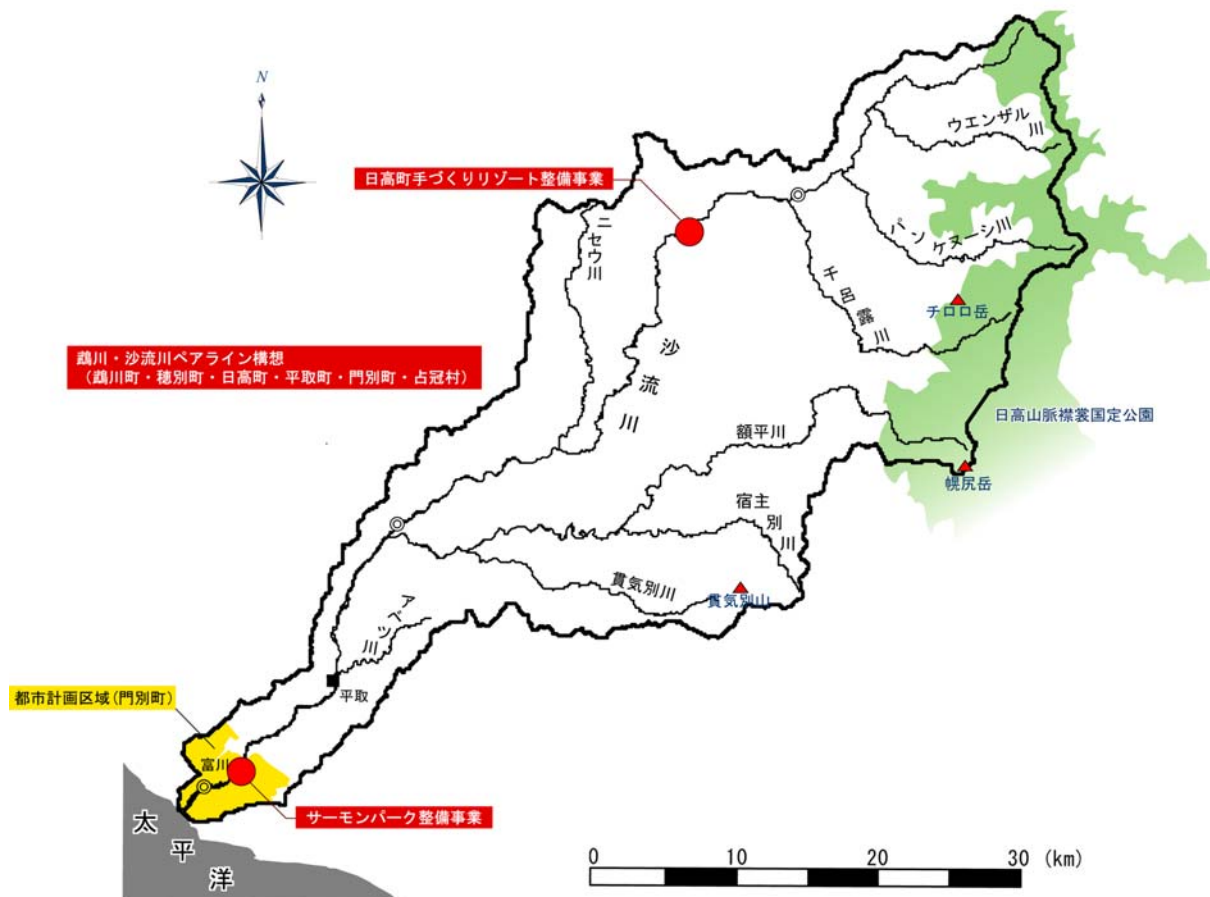


図 3-9 沙流川流域の地域プロジェクト及び都市計画

4.水害と治水事業の沿革

4-1 既往洪水の概要

沙流川における過去の洪水は、台風及び前線に起因するものが多く、内水被害、無堤地区での浸水等により人家や農作物等に多大な被害をもたらしてきている。

表 4-1 既往の主要洪水の概要表

発生年月日	原因	雨量 (mm)	平取地点 流量(m ³ /s)	被害等
明治 31 年 9 月 6 日	台風	不明	不明	日高支庁管内の沙流・静内・新冠の 3 群に被害、家屋全壊 102 戸、同半壊 19 戸、同流失 61 戸、同浸水 351 戸、田被害 8ha、畑同 2,535ha、平取死者 29 人、門別死者 29 人、佐留太小学校流失
大正 11 年 8 月 24～25 日	台風	門別 140	不明	日高支庁管内死者 38 人、負傷者 13 人、家屋流失 228 戸、同浸水 1,136 戸、田浸水 1,043ha、畑同 2,763ha
昭和 10 年 8 月 29～30 日	台風	浦河 55	不明	日高支庁管内死者 1 人、負傷者 62 人、家屋全壊 140 戸、同半壊 241 戸、同流失 76 戸、床上浸水 155 戸、床下同 152 戸、非住家全壊 112 戸、同半壊 232 戸、同流失浸水 292 戸、護岸決壊 2 カ所、道路流失損壊 13 カ所、橋梁同 4 カ所
昭和 30 年 7 月 3 日	低気圧 前線	日高 85	不明	沙流川上流平取町二風谷地区・ヌタツ地区・去場地区・紫雲古津地区、下流門別平賀地区・富川地区・富浜地区氾濫、平取町被害死者 1 人、家屋半壊 5 戸、同流失 12 戸、同浸水 72 戸、氾濫面積 1,927.9ha
昭和 36 年 7 月 24～26 日	低気圧 前線	74	2,920	平取町被害家屋全壊 1 戸、半壊 5 戸、流失 20 戸、床上浸水 63 戸、床下浸水 224 戸、氾濫面積 221ha、門別町床上浸水 2 戸、床下浸水 26 戸
昭和 37 年 8 月 2～4 日	台風 9 号	189	3,470	平取町被害死者 1 人、負傷者 2 人、家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、流失 4 戸、床上浸水 60 戸、床下浸水 99 戸、氾濫面積 590ha、門別町被害床上浸水 58 戸、床下浸水 87 戸、氾濫面積 270ha
昭和 41 年 8 月 17～19 日	低気圧 前線	117	2,180	—
昭和 50 年 8 月 22～24 日	台風 6 号 前線	120	2,250	平取町被害家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、床下浸水 5 戸、氾濫面積 30ha、門別町被害死者 1 人、床上浸水 2 戸、床下浸水 53 戸、氾濫面積 38ha
平成 4 年 8 月 7～9 日	台風 10 号	170	3,310	平取町被害床上浸水 9 戸、床下浸水 40 戸、門別町被害家屋半壊 1 戸、一部破損 2 戸、床上浸水 41 戸、床下浸水 43 戸
平成 9 年 8 月 9～10 日	低気圧 前線	137	1,960	門別町被害床上浸水 2 戸
平成 13 年 9 月 11～13 日	台風 15 号 前線	198	2,000	平取町被害床下浸水 2 戸、門別町被害床上浸水 2 戸、床下浸水 54 戸
平成 15 年 8 月 8～10 日	台風 10 号 前線	307	5,240	平取町被害家屋全壊 3 戸、床上浸水 45 戸、床下浸水 25 戸、門別町被害死者 3 人、重傷 1 人、家屋全壊 7 戸、半壊 6 戸、一部破損 16 戸、床上浸水 34 戸、床下浸水 147 戸

注 1)大正 11 年の雨量は門別 1 日雨量、昭和 10 年は浦河 2 日雨量、昭和 30 年は日高 1 日雨量、昭和 36 年は平取 1 日雨量、昭和 37 年以降は平取上流での流域平均 24 時間雨量。

注 2)平取地点流量は、平取流量観測所の実測流量値。ただし昭和 36 年は洪水報告書記載の痕跡水位からの計算値。平成 13 年、15 年の平取地点流量は二風谷ダムによる洪水調節後流量。

注 3)明治 31 年～昭和 30 年の被害等は「鶴川沙流川治水史」による。昭和 36 年～平成 15 年の被害等は「北海道災害記録」による、平取町と門別町の値。

注 4)北海道災害記録による被害等は集計上、支川、内水被害等を含む。門別町の被害については流域外も含む。

4-2 主な洪水の概要

(1) 明治 31 年 9 月 6 日洪水

明治 31 年（1898）9 月の大水害は、多年にわたる住民の辛苦粒々たる努力も空しく根底から破壊する結果をもたらした。

まず、幌去では浸水畑地 46.6ha のうち将来耕作の見込みのないものが 36ha、長知内では土壌流亡、または、砂利をかぶったもの 31ha で、将来耕作の見込みがあるのはわずかに 2ha、貫気別では土壌流失によって川状になり、また、砂礫に変わったものは 50ha、復旧の見込みのあるものは 20ha、荷負では 50ha が河原と化して復旧の見込みはなかったが、36ha は泥をかぶったが砂礫がなく、一兩年経過すれば耕作可能な状態であった。二風谷は土壌流亡し川状、あるいは砂礫に変わったものは 147ha、平取では水勢がことに激しく、流失建物 5 戸、全壊 3 戸、総反別 182ha は一大礫地に変わり、将来再墾の見込みのあるものは、わずかに 20 分の 1 にすぎなかった。荷菜の本村では流失家屋 7 戸、同馬屋 6 棟、物置 5 棟、行方不明男女 12 人、馬 4 頭という被害を出し、完全に流亡した耕地は約 51ha、そのほかのものも砂礫を流して今後数年は再墾の見込みがなく、同サルバでは流失家屋 8 戸、同壊家 2 戸、厩流失 5 棟、流豚 27 頭、田畑 222ha すべて流失といった状態であった。沙流川の下流に至るほど水量水勢ともに激しく、耕地・建物はおろか人命まで奪う凄惨さであった。

(2) 大正 11 年 8 月 24～25 日洪水

『北海道凶荒災害誌』によると、大正 11 年の洪水は、「8 月 18～19 日頃から小低気圧の発生が頻繁となり、ついで 24 日に至って、台風の襲来あり、それが 24 日深夜から 25 日にわたって本道の南東海岸を過ぎ」とあるが、これは、18～19 日に発生した小低気圧によって湿潤な天候となり、20 日には、まず、第 1 次的なやや多量の降雨があって、以後断続して毎日降雨が続き、24 日には台風の影響を受けた雷雨を加えて再び大量の雨が降り、ついに水害が誘発されたのである。

特に、門別の惨状は厳しく、当時の新聞は「風は咽ぶ門別の惨状」、「門別死屍累々、五十四個の死体漂着」の見出しで報じている。加えて季節も秋冷を過ぎて寒冷に向かい、「食うに食なく着るに衣なく」という状況であった。

(3) 昭和 10 年 8 月 29～30 日洪水

昭和 10 年の洪水も大正 11 年洪水と同様に、南洋海上で発達した台風が国土東海岸を北上し、北海道南縁をかすめて北東に去ったものである。北海道を通過した時の気圧は、742 耗程度であり、かなりの勢力を持ったものであることが推察される。しかしながら、比較的風速が弱いという本道の台風の特性的ため、風速は 16m 程度と推測され典型的な雨台風となった。この時の状況は、日高町史には次のように記されている。

『降り続く雨によって村中の河川が氾濫し、橋梁、道路など破損、流失は 24 件に及び、いたるところで交通は途絶した。また田畑の浸水は実に 108 町歩におよび、収穫皆無の農家が 14 戸、三分作は 29 戸であった。村では食料、稲苗、肥料、医療などすべてにわたって救済をほどこし、また決壊道路や流失橋の復旧に国庫補助をあおぐなど、村の立て直しに奔走した』

(4) 昭和 30 年 7 月 3 日洪水

沿海州の低気圧から本道西方に延びた前線が通過したため、日高の雨量は 85mm に達した。

このため、沙流川上流部の平取町二風谷地区、去場地区、紫雲古津地区が氾濫し、下流部の門別町平賀地区、富川地区、富浜地区が氾濫した。

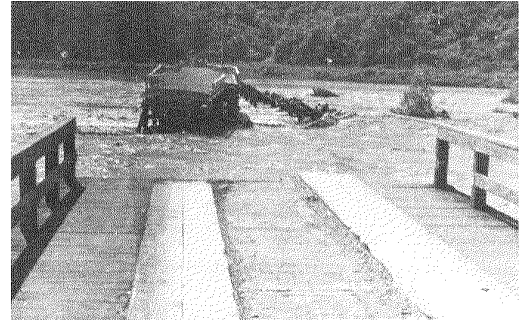
被害は平取町で死者 1 人、家屋半壊 5 戸、同流失 12 戸、同浸水 72 戸で氾濫面積 1,927.9ha に及んだ。

その模様は「日高村五拾年史」に、次のように記されている。

『しのつく雨の降り続きにまんじりともしなかった四日の朝まだき、住民はごうごう遠雷のような音に夢破られ、戸外に飛び出した時は沿岸低地の住家周辺は刻々水が迫り、田畑は水浸しになっていた。貫流沙流川の奔流は見る間に水嵩昂まり、荒れ狂う濁流の咆哮は所嫌わず堤防、道路を嘯みくだき根こそぎの流木は荒波に揉まれて木の葉のように舞ながら、立木をなぎ倒し橋梁を撃破して押し流していった…。かくてこの水勢は大小兩岸の増水を併呑し岩石橋を跡方もなく葬り、沙流川発電所取入口を埋め水路を破壊し、伊藤吊橋を軽く流して余勢をかり右左府橋左岸寄りを中断して三岡橋、三岩吊橋、落成間もない日高橋を押し流していった。大自然の脅威は瞬く間に本流全橋梁を流失し…。』



三島集落家屋流失の跡・昭和 30 年 7 月
(日高村五拾年史)

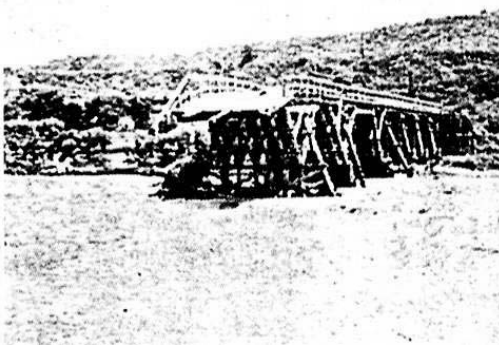


平取大橋の流失・平取町
(昭和 30 年 7 月)

※写真出典: 鶴川沙流川治水史

(5) 昭和 36 年 7 月 26 日洪水

満州の低気圧を伴った不連続線による雨は夜半すぎ本道の西海上に小さな低気圧が発生し、とみに湿った暖気をさそって雨量も多くなり、沙流川水系上流部の豊糠では 24 日から 3 日間の総雨量が 273mm に達した。このため、平取町の紫雲古津地区、ヌタツ地区、二風谷地区、門別町富川地区、富浜地区の各所で氾濫し、平取町の被害は家屋全壊 1 戸、半壊 5 戸、流失 20 戸、床上浸水 63 戸、床下浸水 224 戸で、氾濫面積は 221ha であった。また、門別町では床上浸水 2 戸、床下浸水 26 戸の被害が生じた。



流出した振内橋・広報びらとり
(昭和 36 年 7 月)



必死の護岸作業を行う自衛隊員・広報びらとり
(昭和 36 年 7 月)

※写真出典: 鶴川沙流川治水史

(6) 昭和 37 年 8 月 4 日洪水

台風 9 号の接近にともない本道は 2 日夕方から全道的に大雨となる。その後、台風 9 号は日本海を縦断し、4 日夜半すぎに北海道へ上陸、各地の大雨による被害はさらに広がった。この台風 9 号により、沙流川水系平取の雨量は 108.3mm に達し、沙流川上流の平取町紫雲古津地区、ヌタツ地区、オユンベ地区、下流の門別町富川左岸地区、富川右岸地区の各所で氾濫した。被害は平取築堤が溢水、二風谷築堤が決壊するに及び、平取町では死者 1 名、負傷者 2 名、家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、流失 4 戸、床上浸水 60 戸、床下浸水 99 戸、氾濫面積 590ha となった。さらに門別町では家屋床上浸水 58 戸、床下浸水 87 戸、氾濫面積 270ha に及んだ。



越水寸前の去場築堤

※写真出典:北海道開発局



平取築堤での水防活動

※写真出典:北海道開発局



平取橋より上流を見る

※写真出典:昭和 37 年(1962)8 月上旬 直轄河川の洪水報告

(7) 昭和 50 年 8 月 24 日洪水

日本海を北上した台風 6 号と寒冷前線の影響で、23 日から 24 日の早朝にかけ日高地方に大雨が降り、沙流川水系の振内では、8 月 19 日から 20 日にかけて台風 5 号と同月の 22 日から 24 日にかけての台風 6 号による影響で 19 日から 24 日の雨量は 140mm になった。このため沙流川上流の平取町紫雲古津地区、荷葉去場地区、平取地区、下流部の門別町河口左岸地区、富川地区の各所で内水氾濫があった。被害は平取町が家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、床下浸水 5 戸、氾濫面積 30ha で、門別町では死者 1 名、床上浸水 2 戸、床下浸水 53 戸、氾濫面積 38ha であった。



沙流川左岸・門別町富浜地区洪水
(昭和 50 年 8 月)

※写真出典: 鶴川沙流川治水史

(8) 昭和 56 年 8 月 5 日洪水

オホーツク海より渡島半島を越えて日本海に達した前線および台風 12 号の影響により、3 日夜半から降り出した強い雨のため、浦賀測候所では 8 月 5 日 2 時 35 分、大雨洪水警報、雷雨強風波浪濃霧注意報を発表した。強い雨はその後も降り続き、5 日夜半までに日高 179mm、平取 290mm、富川 350mm に達し、沙流川水系平取観測所では警戒水位を 15cm 超えて 24.25m に達した。このため沙流川水系の平取で紫雲古津地区の内水氾濫、門別町では富川地区、河口左岸地区、河口右岸地区の各所で氾濫した。被害は平取町で床上浸水 3 戸、床下浸水 31 戸、門別町では死者 1 名、負傷者 5 名、家屋の全壊 27 戸、半壊 13 戸、一部破損 19 戸、床上浸水 173 戸、床下浸水 491 戸に達した。



河口右岸 表町樋門外水氾濫



富川地区 富川橋外水氾濫

※写真出典: 昭和 56 年 8 月洪水 鶴川沙流川洪水報告書

(9) 平成 4 年 8 月 9 日洪水

九州地方を縦断し日本海を北上してきた中型で並みの強さの台風 10 号は、秋田市の西北西約 100km の位置で温帯低気圧に変わり東北地方北部から本道南岸を通過した。これにより 8 日夕方より降り出した強い雨のため、室蘭地方気象台は、8 月 9 日 11 時に胆振東部に大雨洪水警報を発令した。また、浦河測候所は、8 月 9 日 13 時に日高全域に大雨洪水警報を発令した。その後、強い雨が継続的に 9 日夜半まで降り続き、降り始めからの総雨量は、富川 214mm、平取 205mm に達した。このため、沙流川水系平取観測所では警戒水位を 2.80m 越えた 26.90m に達した。これによって、平取町では、床上浸水 9 戸、床下浸水 40 戸、門別町では、家屋半壊 1 戸、一部破損 2 戸、床上浸水 41 戸、床下浸水 43 戸などの被害が生じた。



さるがわせせらぎ公園付近出水状況



さるがわせせらぎ公園被災状況



コンカン川樋門付近出水状況



沙流川河口 出水状況

※写真出典:平成 4 年 8 月 9 日洪水 鶴川沙流川洪水報告書(速報版)

(10) 平成 13 年 9 月 11 日洪水

北海道は 9 日から本州より伸びる気圧の谷の中に入った状態が続き、秋雨前線が 10 日から北海道付近に停滞した。11 日にかけて前線は太平洋沿岸に南下したが台風 15 号から湿った暖湿気流が入って、前線活動が活発化した。

室蘭地方気象台は、11 日 6 時 00 分に日高地方に「大雨・洪水警報」また、6 時 20 分には胆振地方に「大雨・洪水警報」を発令した。

降り始めからの総雨量は、沙流川水系日高(開)263mm、平取(開)316mm、富川(開)292mm に達する大雨となった。

このため、沙流川水系富川観測所では警戒水位を 1m46cm 上回る 5.96m、平取観測所では警戒水位を 1m54cm 上回る 25.64m に達した。



門別町せせらぎ公園浸水状況(河川公園)

※写真出典:北海道開発局

(11) 平成 15 年 8 月 10 日洪水

サハリン方面を通過した低気圧に伴う寒冷前線が 8 日から 9 日朝にかけて北海道を通過しまとまった雨が降った。その後、前線は北海道の南海上に停滞した。

一方、大型で強い台風 10 号は、8 日夜四国の室戸市付近に上陸した後、9 日は本州を縦断して、三陸沖沿岸から太平洋に抜けた。この台風から送りこまれる暖湿気流の影響で北海道の南海上に停滞していた前線は 9 日朝から活動が活発となり、強い雨が降り始めた。

室蘭地方気象台は 9 日 11 時に胆振・日高地方全域に「大雨洪水警報」を発令した。

台風は 9 日夜遅くには北海道に近づき 10 時午前 2 時過ぎ襟裳岬付近を通過して十勝、釧路地方の海岸沿いを北東へ進み、10 日 6 時に根室の北で温帯低気圧に変わった。

降り始めからの総雨量は沙流川水系では、仁世宇(開)394mm、日高(開)360mm、岩知志(開)371mm。

このため、沙流川水系富川観測所では計画高水位を 60cm 上回る 7.66m、平取観測所では計画高水位を 74cm 上回る 28.29m に達した。

今回の降雨の特徴は、前線と台風による雨のため降雨継続時間が長く、さらに、台風 10 号が接近した 9 日 14 時から 10 日 0 時の間、1 時間に 20～60mm の雨が 5 時間位と強い雨が連続したことがあげられる。

平取町宿主別では、総雨量 433mm、また、平取町旭では最大 1 時間雨量 75mm と、まさに記録的な雨量となった。



沙流川富川地区浸水状況下流から望む



二風谷ダム下流から放流状況



沙流川橋出水状況

※写真出典:北海道開発局

4-3 治水事業の沿革

沙流川流域一帯は、地味肥沃・気候温順のため、農林業適地として入植も明治初期から始まり、逐次開発が進められた。開発が進む中で、明治 31 年 9 月、大正 11 年 8 月の大洪水などの出水による被害も大きかったが、計画的な治水事業は行われず、わずかに第二期拓殖計画の河川費により、昭和 9 年に額平川合流点から河口までの部分的な低水路工事が着手されるにとどまっていた。

その後、昭和 23 年に国費応急河川改修費により平取市街地付近の築堤に着手されたが、本格的な改修工事は昭和 25 年の北海道開発法の制定以降であり、昭和 27 年度からの北海道総合開発第一次五箇年計画では、平取、荷葉去場地区の築堤等に着手されるに至った。

一方で、計画高水流量を基準地点平取において $3,900\text{m}^3/\text{s}$ とする沙流川改修全体計画を昭和 28 年に取りまとめ、これに従って工事を進めてきた。

その後、昭和 36 年 7 月、37 年 8 月、50 年 8 月に大洪水があり、また、流域の発展に伴う氾濫区域内人口並びに資産の増大にかんがみ、計画の見直しに着手し、昭和 53 年 3 月に基準地点平取における基本高水ピーク流量を $5,400\text{m}^3/\text{s}$ 、上流ダム等により $1,500\text{m}^3/\text{s}$ の洪水調節を行い計画高水流量を $3,900\text{m}^3/\text{s}$ として工事実施基本計画を改定した。

本工事実施基本計画にともない築堤工事をおこない、流下能力の向上および河岸の強化を図るとともに、多目的ダム建設の沙流川総合開発事業(二風谷ダムが平成 9 年度完成)などの事業を進めてきた。

平成 9 年の河川法改正を受け、河川整備の基本となるべき方針に関する事項を定めた「沙流川水系河川整備基本方針」を平成 11 年 12 月に策定し、現在に至っている。

しかし平成 15 年 8 月に、基本高水を超える洪水が発生し、社会及び地域経済に大きな影響を与えたことから、地域特性を踏まえた治水対策が急務となっている。



二風谷ダム

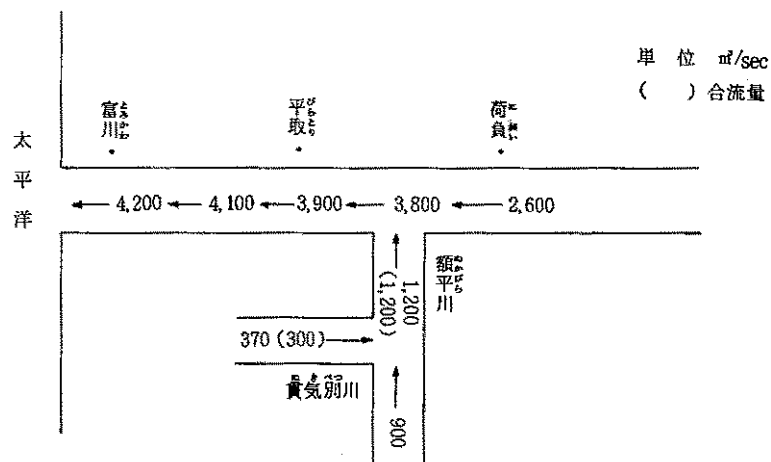


平取ダム(完成予想図)

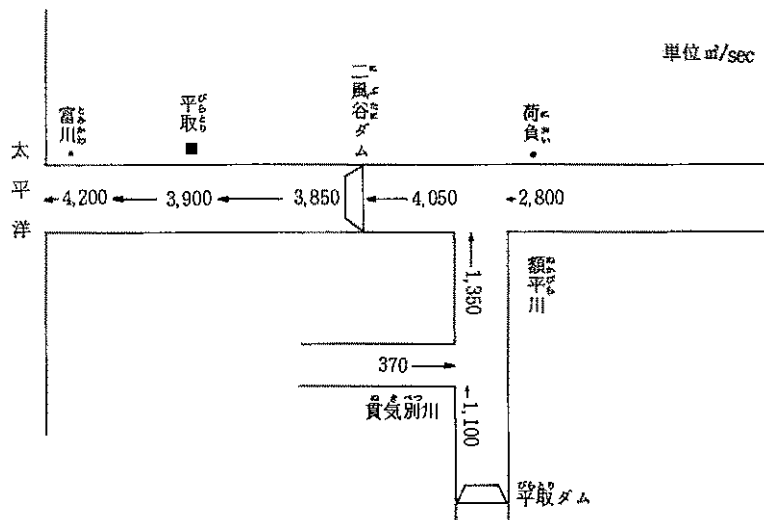
※出典:北海道開発局

■沙流川水系工事実施基本計画、河川整備基本方針の変遷

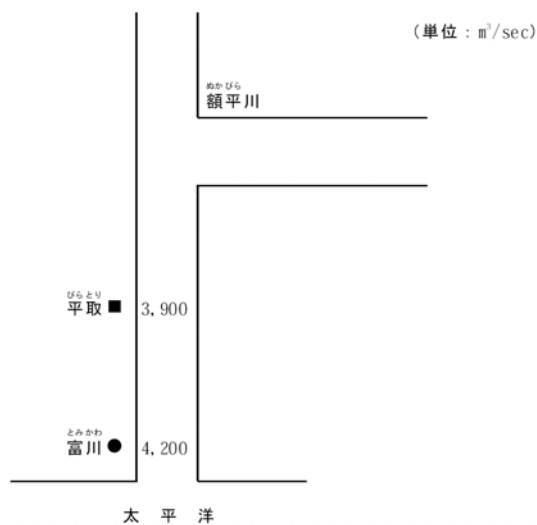
○沙流川水系工事実施基本計画(昭和44年3月)



○沙流川水系工事実施基本計画(昭和53年3月)改定



○沙流川水系河川整備基本方針(平成11年12月)



5. 水利用の現状

5-1 水利用の変遷

河川の利用については、開拓農民による農業用水の利用に始まり、農業用水としては、約 2,400ha に及ぶ耕地のかんがい利用され、水力発電としては、昭和 33 年に建設された岩知志発電所による最大出力 13,500kW 及び平成 8 年に建設された二風谷ダムの二風谷発電所による最大出力 3,000kW、昭和 34 年建設された右左府発電所による最大出力 25,000kW などの電力供給が行われ、上水道用水としては、日高町、平取町、門別町に対して供給が行われている。

沙流川水系における利水状況は、かんがい用水が最大約 13.3m³/s、水道用水が 0.07m³/s、発電には岩知志発電所外 4 ヶ所で最大 54.6m³/s、二風谷発電所で最大 35.0m³/s の計 89.6 m³/s、等が利用されている。

表 5-1 沙流川水系水利用現況（法定河川内の許可水利）

名 称	最大取水量(m ³ /s)	件 数
発電	89.60	5
かんがい	13.32	105
工業	0.12	5
上水道	0.07	4
雑用水	0.15	4
計	103.26	123

(平成16年3月現在)

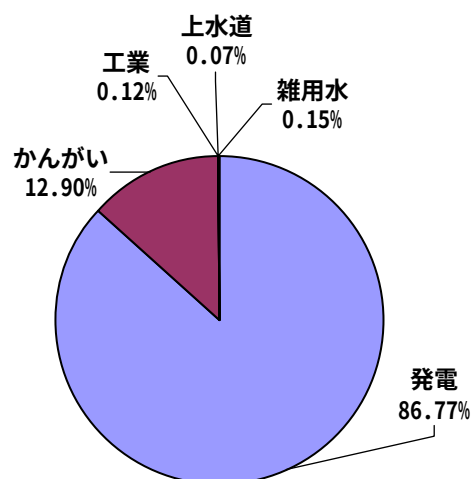


図 5-1 水利用割合図

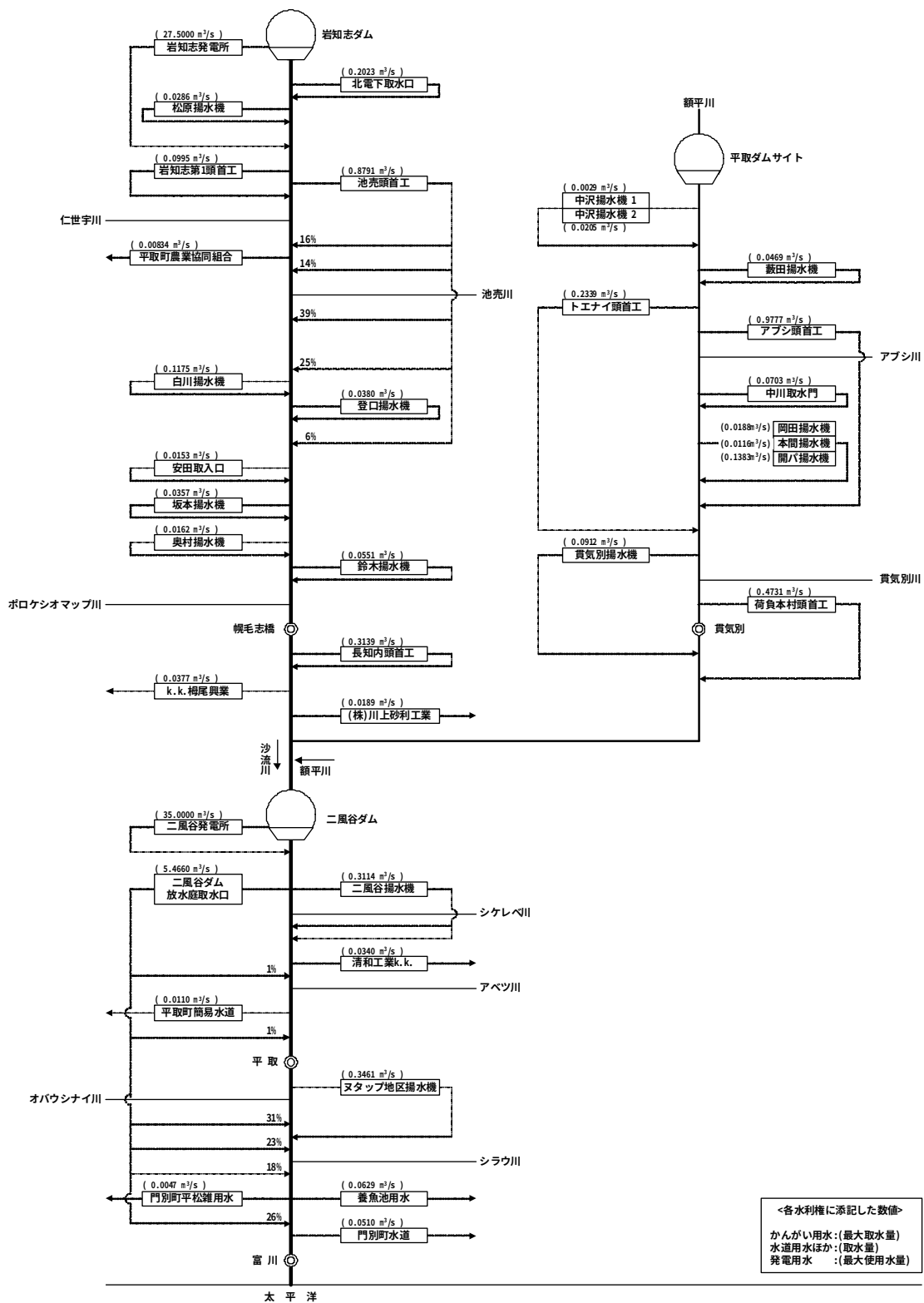


図 5-2 沙流川水利模式図

5-2 渇水被害及び渇水調整

沙流川水系において、過去に大きな渇水被害の報告はない。また、過去に渇水調整は行っていない。

6. 河川流況及び水質

6-1 河川流況

沙流川水系は、北海道では比較的降雨の少ない地域である。

春の降水量は少なく乾燥期を呈するのに反して、夏の終わりに秋にかけて天気は崩れ全般的に雨が多い。年平均降水量は日高門別で 1,003mm、日高 1,410mm である。月別では、8 月が最も多くなっている。

平取地点における流況は表 6-1のとおり、昭和 33 年～平成 15 年までの 46 年間の平均で、低水流量約 16m³/s、渇水流量約 9.3m³/s となっている。また富川地点における流況は表 6-2のとおり、昭和 39 年～平成 15 年までの 40 年間の平均で、低水流量約 19m³/s、渇水流量約 11m³/s となっている。

表 6-1 平取地点における流況表

No.	年	流 量					
		豊水 (m ³ /s)	平水 (m ³ /s)	低水 (m ³ /s)	渇水 (m ³ /s)	日最小 (m ³ /s)	年平均 (m ³ /s)
1	昭和33年	61.08	31.32	16.95	10.90	6.95	47.56
2	34	64.16	33.75	12.32	7.89	4.04	48.85
3	35	29.00	21.80	18.60	6.40	4.10	29.23
4	36	63.80	39.60	17.20	7.60	2.80	54.13
5	37	83.80	26.60	12.50	8.50	7.60	65.87
6	38	—	—	—	—	—	—
7	39	62.82	33.03	22.43	11.54	9.26	47.38
8	40	62.36	29.49	17.82	11.25	8.99	50.72
9	41	72.41	39.73	20.80	11.86	9.40	63.30
10	42	52.14	29.19	18.93	10.12	7.95	40.02
11	43	55.23	32.74	16.28	9.99	8.59	45.10
12	44	63.50	29.56	17.52	9.39	6.65	47.32
13	45	58.10	24.36	14.22	11.60	7.72	56.81
14	46	59.33	35.21	16.66	6.89	5.81	48.72
15	47	76.02	38.72	15.98	8.68	6.92	57.37
16	48	86.02	40.28	13.12	7.87	6.90	63.61
17	49	79.17	41.13	12.92	7.82	6.75	64.88
18	50	71.16	36.26	20.92	10.67	6.98	67.42
19	51	55.79	27.40	15.25	9.63	7.12	43.31
20	52	54.67	24.70	14.81	7.84	5.59	43.61
21	53	46.44	24.58	16.98	8.58	4.87	38.40
22	54	69.36	39.31	17.13	9.54	4.90	51.32
23	55	52.24	25.45	15.38	9.84	7.18	43.41
24	56	72.73	35.54	19.29	8.23	5.50	61.42
25	57	54.61	27.64	16.27	8.34	6.99	47.49
26	58	35.37	22.31	15.84	8.77	6.30	30.18
27	59	27.41	13.60	9.56	7.06	5.34	21.36
28	60	40.90	20.65	9.93	7.01	5.22	32.06
29	61	40.48	21.12	13.03	7.70	6.86	37.50
30	62	51.11	24.32	14.60	9.19	7.96	45.21
31	63	42.13	21.34	12.39	8.44	6.80	33.91
32	平成元年	65.14	37.98	17.32	8.25	6.71	51.42
33	2	64.79	34.33	18.54	9.38	7.63	48.98
34	3	45.85	25.74	16.60	9.34	7.40	38.28
35	4	77.51	44.53	18.16	9.24	6.92	65.49
36	5	58.87	27.09	17.26	11.79	8.76	44.31
37	6	53.59	24.01	15.03	6.70	4.75	43.97
38	7	82.03	41.21	19.15	8.65	7.06	57.51
39	8	56.55	32.40	15.52	8.57	6.52	45.54
40	9	68.96	41.32	16.74	9.82	8.17	60.73
41	10	60.71	32.52	19.24	11.66	11.14	53.39
42	11	54.60	35.70	22.55	10.25	9.72	55.88
43	12	64.12	33.72	18.31	11.98	11.34	58.00
44	13	60.18	34.16	17.22	12.89	11.67	53.97
45	14	43.58	28.72	18.14	10.86	9.87	38.45
46	15	49.21	34.17	14.82	10.54	9.92	50.45
平均値		58.87	31.07	16.45	9.31	7.24	48.75
最大値		86.02	44.53	22.55	12.89	11.67	67.42
最小値		27.41	13.60	9.56	6.40	2.80	21.36
1/10渇水流量					7.06		

流域面積：1,323.0 m³/s

※出典：北海道開発局 流量年表

表 6-2 富川地点における流況表

No.	年	流量					
		豊水 (m^3/s)	平水 (m^3/s)	低水 (m^3/s)	渇水 (m^3/s)	日最小 (m^3/s)	年平均 (m^3/s)
1	昭和39年	66.83	36.90	24.36	11.90	9.69	50.89
2	40	64.80	32.39	20.20	11.76	9.18	54.58
3	41	78.32	43.64	21.68	12.38	9.64	67.49
4	42	57.01	33.08	21.27	10.75	8.40	43.81
5	43	60.32	34.62	20.76	10.57	9.04	49.37
6	44	70.22	32.32	18.62	9.98	6.99	51.38
7	45	61.28	27.28	17.07	12.24	7.86	61.17
8	46	64.71	38.69	17.43	7.06	5.97	53.03
9	47	84.88	40.95	18.50	9.08	6.98	62.30
10	48	84.52	38.78	15.93	11.30	7.81	67.29
11	49	93.81	41.56	16.90	11.39	10.85	70.81
12	50	67.76	36.29	19.74	12.11	9.67	68.78
13	51	61.82	24.15	14.93	10.92	8.60	45.80
14	52	54.45	28.13	17.27	9.94	7.81	46.85
15	53	48.90	25.09	18.30	9.26	5.31	40.06
16	54	76.09	43.46	22.77	11.00	8.97	59.23
17	55	56.90	29.55	16.03	10.79	7.98	47.02
18	56	81.62	40.20	20.81	8.12	5.56	69.34
19	57	58.46	33.19	18.20	11.18	7.28	51.77
20	58	40.27	25.72	17.96	11.78	7.83	34.94
21	59	32.04	18.87	12.80	8.96	7.13	24.84
22	60	45.83	23.84	12.63	8.16	5.75	36.81
23	61	50.90	26.27	17.14	9.26	7.51	45.60
24	62	62.80	29.90	19.84	10.57	9.38	52.49
25	63	46.79	24.38	17.32	11.66	9.94	39.14
26	平成元年	69.09	40.76	22.01	9.62	8.68	56.74
27	2	60.33	35.79	21.46	10.14	7.65	50.91
28	3	50.18	32.31	20.92	11.50	7.27	42.43
29	4	75.92	45.27	17.96	9.70	8.80	66.75
30	5	55.14	30.07	19.98	13.58	12.12	45.39
31	6	57.82	26.18	17.31	11.39	9.00	46.38
32	7	86.52	45.37	21.64	10.33	9.58	62.12
33	8	57.97	36.45	18.62	12.83	9.19	48.37
34	9	70.09	44.61	20.87	11.57	10.13	65.69
35	10	65.20	36.42	22.68	11.95	11.38	59.97
36	11	55.17	35.28	21.38	11.63	8.73	56.43
37	12	67.05	32.66	19.72	11.40	10.18	59.16
38	13	64.33	36.86	20.13	10.84	10.18	56.96
39	14	52.04	35.25	22.93	11.37	10.70	45.67
40	15	57.92	37.66	16.00	10.72	10.42	55.68
平均値		62.90	34.00	19.05	10.77	8.63	52.84
最大値		93.81	45.37	24.36	13.58	12.12	70.81
最小値		32.04	18.87	12.63	7.06	5.31	24.84
1/10渇水流量					8.96		

流域面積：1,253.0 m^3/s

※出典：北海道開発局 流量年表

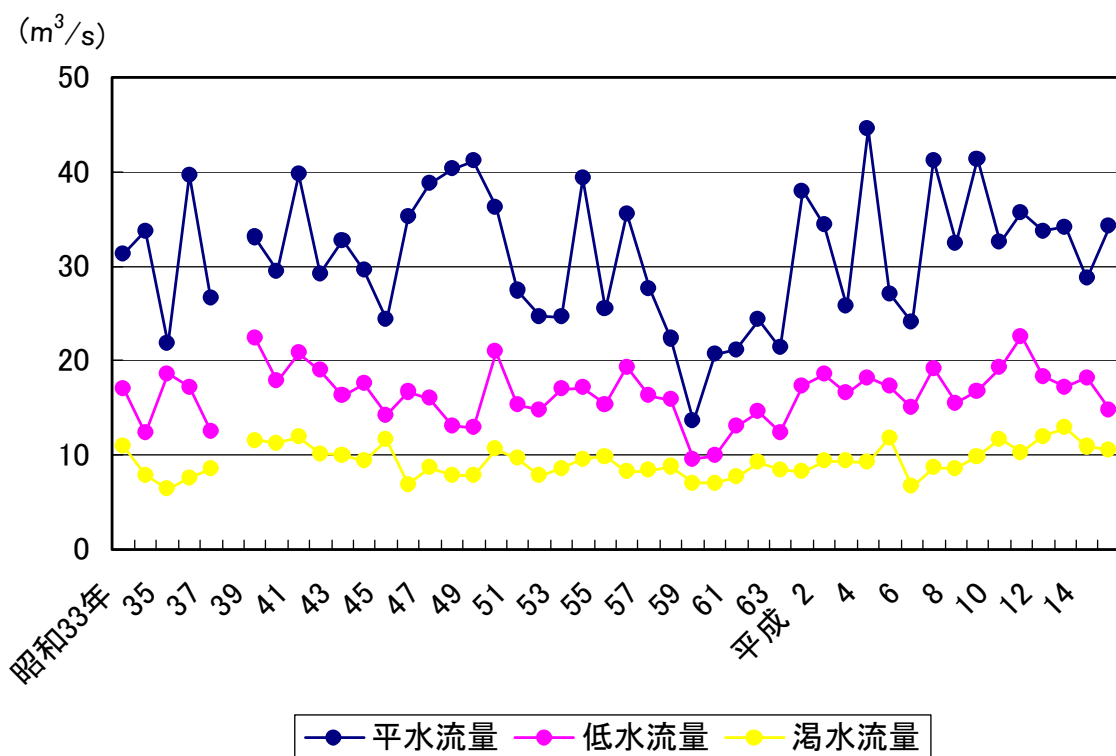


图 6-1 平取地点流況経年変化図

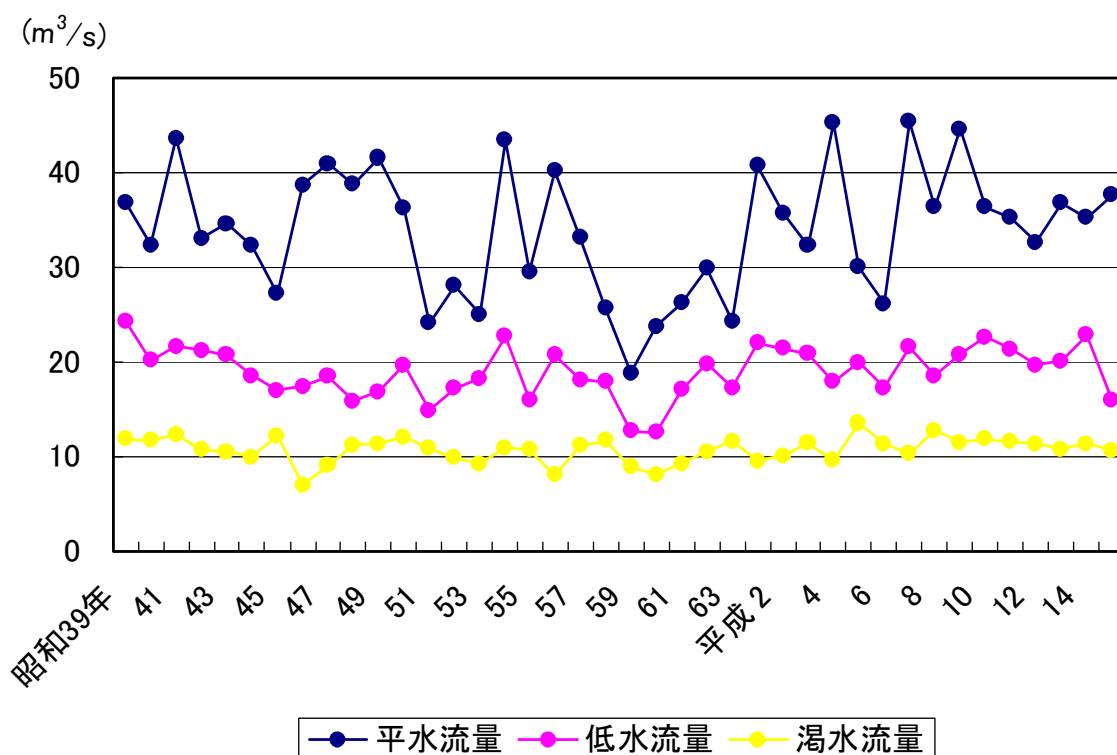


图 6-2 富川地点流況経年変化図

※出典：北海道開発局 流量年表

6-2 河川水質

沙流川流域では、表 6-3及び図 6-3に示すように水質環境基準が指定されており、千呂露川合流点から上流側はA A類型、千呂露川合流点から額平川合流点まではA類型、額平川合流点から下流はB類型に指定されている。

現況水質は、下流の長知内橋、平取水位観測所、沙流川橋に関しては図 6-4に示すように近年は河川環境基準A A類型（1.0mg/l）以下でほぼ横ばいに推移している。



図 6-3 沙流川水系水質環境基準地点および類型指定区間

※出典：北海道 道内水域類型指定状況 平成 14 年 10 月 1 日現在

表 6-3 環境基準の類型指定状況（昭和 47 年 4 月 1 日北海道告示）

水域の範囲	類型	達成期間	環境基準地点名
沙流川上流 「千呂露川合流点から上流（千呂露川を含む）」	A A	イ	千呂露橋
沙流川中流 「千呂露川合流点から額平川合流点まで（額平川を含む）」	A	イ	長知内橋
沙流川下流 「額平川合流点から下流」	B	イ	沙流川橋
千呂露川 「沙流川合流点から上流」	A A	イ	—
額平川 「沙流川合流点から上流」	A	イ	—

（注）イ：直ちに達成

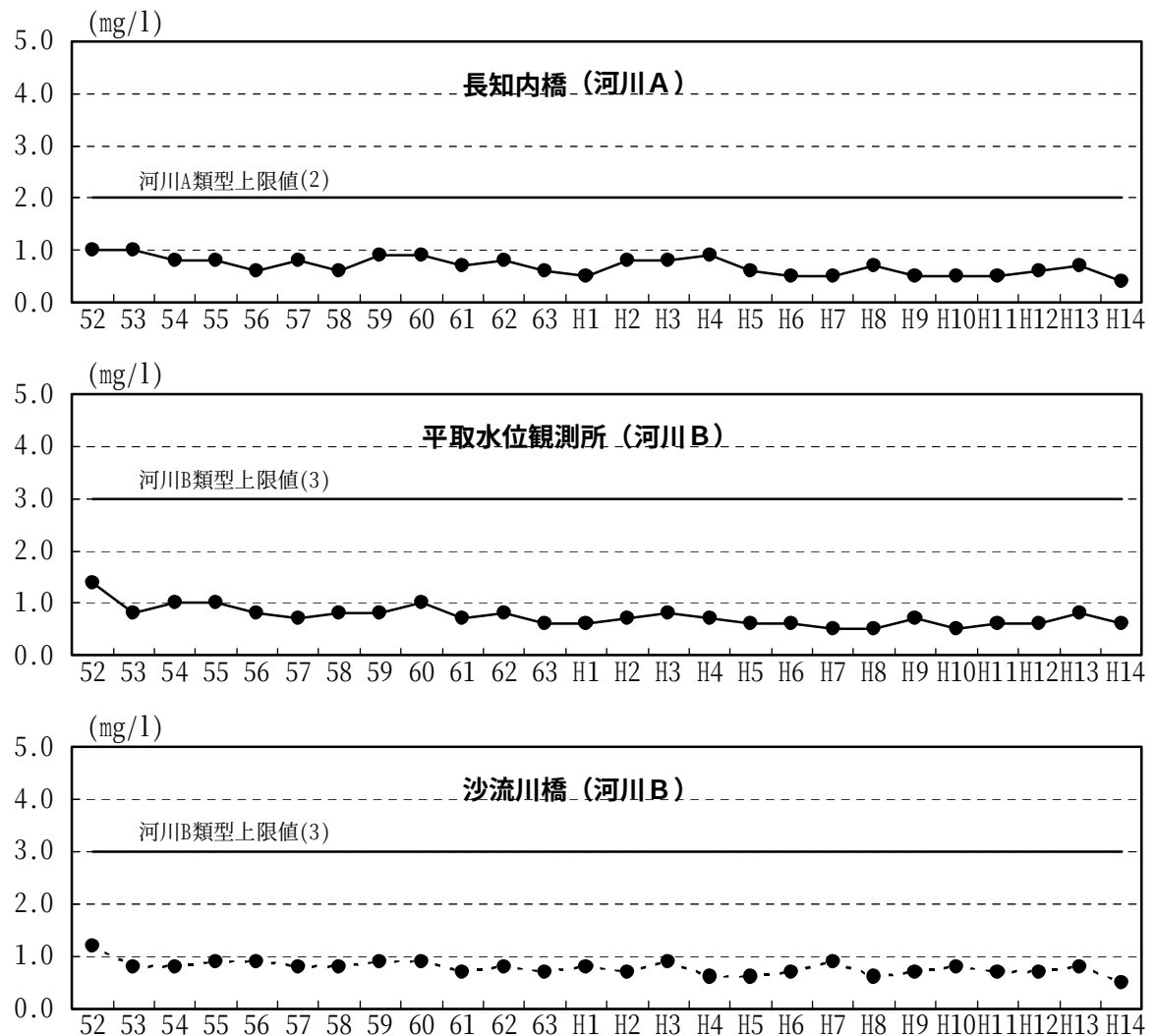


図 6-4 沙流川環境基準地点（北海道開発局）における BOD75%値の経年変化

※出典：北海道 公共用水域の水質測定結果

7.河川空間の現状

7-1 河川数等の利用の状況

7-1-1 河川敷地の利用状況

平成 15 年度に実施した「沙流川水系河川空間利用実態調査」によれば、沙流川水系の年間河川空間利用者総数(推定)は約 3.1 万人で、平成 12 年度調査から約 8.6 万人の減少である。沿川市町村人口から見た年間平均利用回数は約 1.6 回となっている。

利用形態別では散策等が最も多く 51%を占め、次いでスポーツが 37%と続き、両者で 88%を占める。水遊びは 12%、釣りは 1%に満たなかった。

利用場所別では高水敷が 80%と最も多く、次いで水際が 12%、堤防が 8%と続き、水面の利用者は 1%に満たない。

平成 15 年度は平成 12 年度に比べ、河川利用者の年間推計値は 3 分の 1 以下に減少している。

利用形態別ではスポーツと釣りの利用割合が減り、その分散策等、水遊びでの利用割合が増加している。利用場所別では堤防の利用が減り、高水敷、水際の利用が増加している。

利用者数増加の原因として、土曜、日曜、祝日に曇りや雨などの肌寒かった日が多かったことがあげられる。

※ 河川水辺の国勢調査(河川空間利用実態調査)による

区分	項目	年間推計値(千人)			利用状況の割合		
		平成10年度	平成12年度	平成15年度	平成10年度	平成12年度	平成15年度
利用形態別	スポーツ	6	58	12			
	釣り	2	9	0			
	水遊び	2	0	4			
	散策等	13	49	16			
	合計	23	117	31			
利用場所別	水面	0	0	0			
	水際	4	9	4			
	高水敷	16	92	25			
	堤防	3	16	3			
	合計	23	117	31			

※ 河川水辺の国勢調査(河川空間利用実態調査)による。

図 7-1 沙流川の年間空間利用状況

7-1-2 高水敷の利用状況

沙流川は、広大な河川空間を有しており、特に高水敷は背後地の諸条件により、その地域のニーズに適応した利用がなされている。

沙流川の流域においては、軽種馬が基幹産業であり大規模経営がなされていることから、高水敷という広い空間を採草放牧地として大いに利用しているところである。また、沙流川流域の門別町の都市区域においては、自然のうるおいとやすらぎを得られる貴重なオープンスペースとして、広場・公園・緑地など多目的に利用されている。

沙流川での河川敷地としての利用状況は、表の通りである。

表7-1 河川敷地の占用状況（直轄管理区間）

単位：ha、下段（ ）：％

河川名	河川公園		水田耕作		畑 耕 作		採草地		放牧地		仮設建物		そ の 他		合 計	
	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積
沙流川	2	21.5 (11)	20	8.9 (5)	—	—	66	64.0 (32)	31	93.0 (47)	—	—	83	9.8 (5)	202	197.2 (21)

注）平成16年12月22日現在

7-2 河川の利用状況

沙流川は、沿川住民の多様な要請に伴い、沙流川橋周辺の河川環境整備事業、二風谷ダム、平取ダム建設に伴う周辺環境整備構想等が進められており、また、鶴川・沙流川ペアライン構想や、日高町手づくりリゾート整備事業、門別サーモンパーク整備事業等の計画がある。

河川空間を利用したイベントとしては、富川地区のししゃもまつりや門別夏まつり、二風谷地区の「にぶたに湖水祭り」（二風谷ダム湖）やチプサンケ（沙流川、アイヌ文化の舟おろしの儀式）、平取町最大の祭りである沙流川祭り等が実施されている。また平取町ではアイヌ文化を紹介するアイヌ文化博物館、地域の歴史や自然・二風谷ダム等を紹介する沙流川歴史館には、町外から多数の観光客が訪れている。これら地域独特の観光資源を生かし、さらに体験学習も試行しながら、観光関連産業の発達と活性化を目指している。また、一般的な利用としては、釣り、散歩、ピクニック、レクリエーション等を主体に、自然豊かな溪流や施設整備されている箇所等が利用場所となっている。



せせらぎ公園



ししゃも祭り（門別町）



チプサンケ祭り（平取町）



二風谷アイヌ文化博物館（平取町）



釣り大会に集う人々（日高町）

※ 出典：鶴川・沙流川物語（北海道開発局）

沙流川河川環境マップ

沙流川ダム建設事業所パンフレット（北海道開発局）

8. 河道特性

沙流川は、日高山脈に源を発し、ほぼ南西方向に流下している。途中、芽室岳(1,754m)、ルベシベ山(1,740m)、チロロ岳(1,880m)、ピハイロ岳(1,917m)等に源を発するウエンザル川、ペンケヌシ川、パンケヌシ川、千呂露川等と合流し日高町の市街地に至る。さらに戸蔦別岳(1,960m)、幌尻岳(2,052m)に源を発する額平川等の支川と合流し、平取町本町の市街地を経て門別町富川にて太平洋に注いでおり、流域面積は 1,350km²、幹川流路延長は 104km の一級河川である。

1) 上流部(岩知志ダム上流)

上流部は、日高山脈が日高造山運動の時代に概成された標高 600m 以上の大起伏山地で、山腹斜面は急峻な満壮年期的な地形をしており、標高 1,600m 以上の山腹にはカール地形が発達している。これより下流は、標高 200～600m 程度の中小起伏山地で、河川沿いに砂礫台地が広がる。河床勾配は 1/130～1/50 程度と急勾配である。

2) 中流部(岩知志ダム～二風谷ダム)

中流部はおおよそ標高 200～400m の小起伏山地で、河岸段丘の発達が顕著な晩壮年期的地形を示している。河床勾配は 1/190 程度である。

3) 下流部(二風谷ダム下流)

下流部は、標高 100m 以下で、河岸段丘も見られ、平取本町から下流部には沖積平地の発達もみられるようになり、晩壮年期、老年期的地形を示す。河口までの勾配が 1/500～1/700 程度と急流で、ほぼ一定勾配の沖積地河川である。

河道形状は、高水敷の狭い複断面河道が多く、低水路は堤間内で大きく蛇行している。

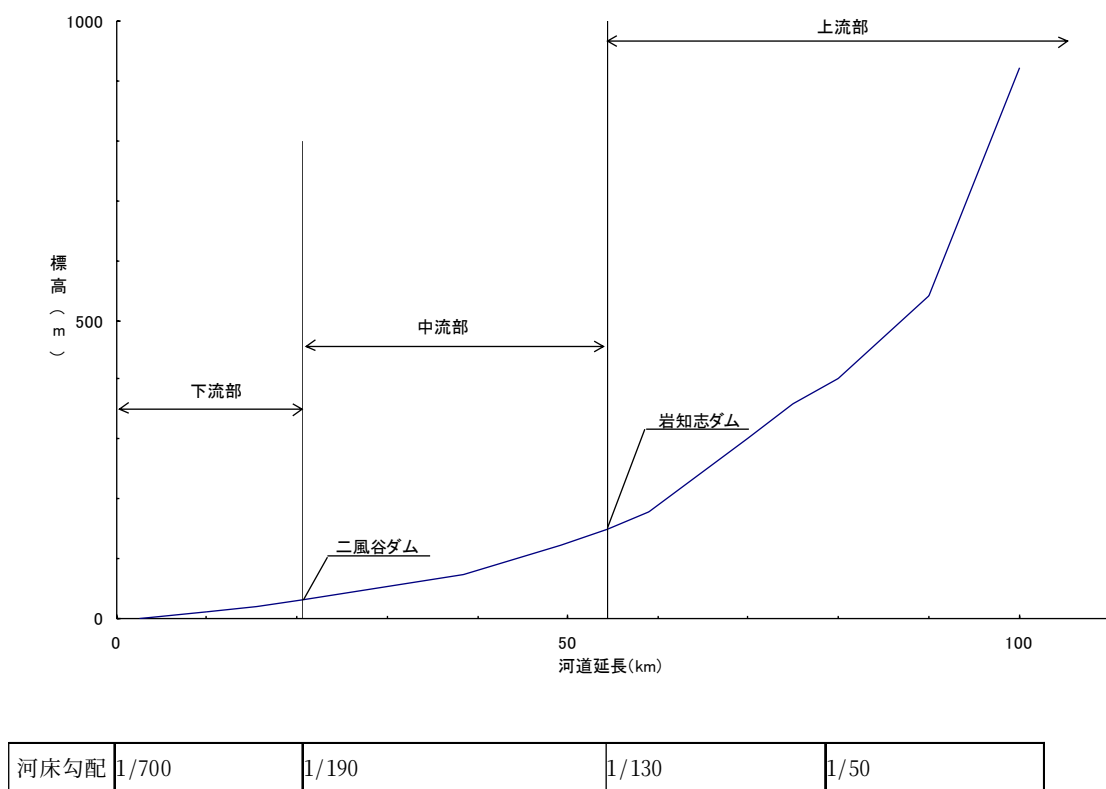


図 8-1 沙流川河床高縦断面図

9. 河川管理の現状

9-1 河川管理施設

沙流川における河川管理施設等の整備状況は下記のとおりである。

(1) 堤防

堤防整備の現状(平成 17 年 3 月末現在)は下記のとおりである。

	延長(km)
完成堤防	14.6(26.5%)
暫定堤防	7.4(13.5%)
未施工区間	2.0(3.6%)
堤防不必要区間	31.0(56.4%)
計	55.0

※延長は、直轄管理区間(ダム管理区間を除く)の左右岸の計である。

(2) 洪水調節施設

- 1) 完成施設:二風谷ダム
- 2) 事業中施設:平取ダム
- 3) 残りの洪水調節施設:なし

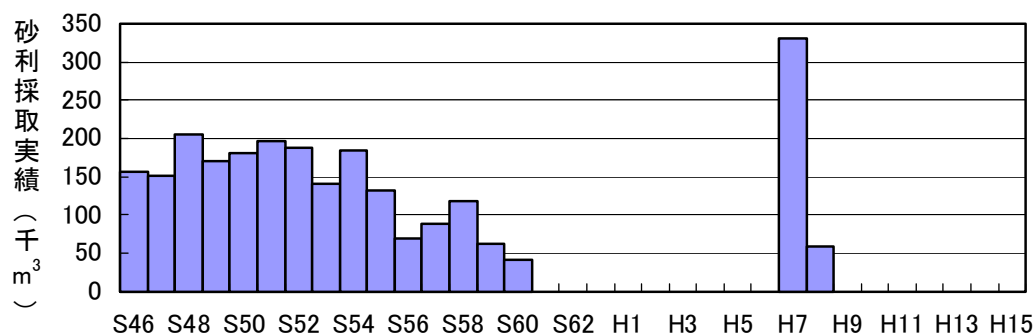
(3) 排水機場等

・なし

※直轄管理区間の施設のみである。

9-2 砂利採取

沙流川においては、河床の低下の防止、河川管理施設及び許可工作物の維持管理のため、昭和 61 年度から砂利採取規制がおこなわれている。



平成 7 年、8 年は沙流川頭首工から上流の河道改修計画に伴う掘削

図 9-1 沙流川水系 年度別砂利採取実績

9-3 水防体制

(1) 河川情報の概要

沙流川では、流域内に雨量観測所(17箇所)、水位観測所(4箇所)を設置し、無線等により迅速に情報収集をおこなうとともに、これらのデータを用いて河川の水位予測等をおこない水防活動に活用している。また、近年では光ケーブル網により接続された遠隔監視カメラを用いた管理もおこない、迅速な水防活動の一助となっている。

(2) 水防警報の概要

沙流川では、洪水による災害が起こる恐れがある場合に、新平取大橋などの基準となる水位観測所の水位をもとに市町村を含む水防関係機関に対し、河川の巡視や災害発生防止のための水防活動が迅速かつ的確におこなえるように水防警報を発令している。

(3) 洪水予報

沙流川では、水防法および気象業務法に基づき、「洪水予報」を気象台と共同で発表している。流域の雨量や水位の状況、水位予測等を一般住民にわかりやすく迅速に伝えるべく整備を進めている。

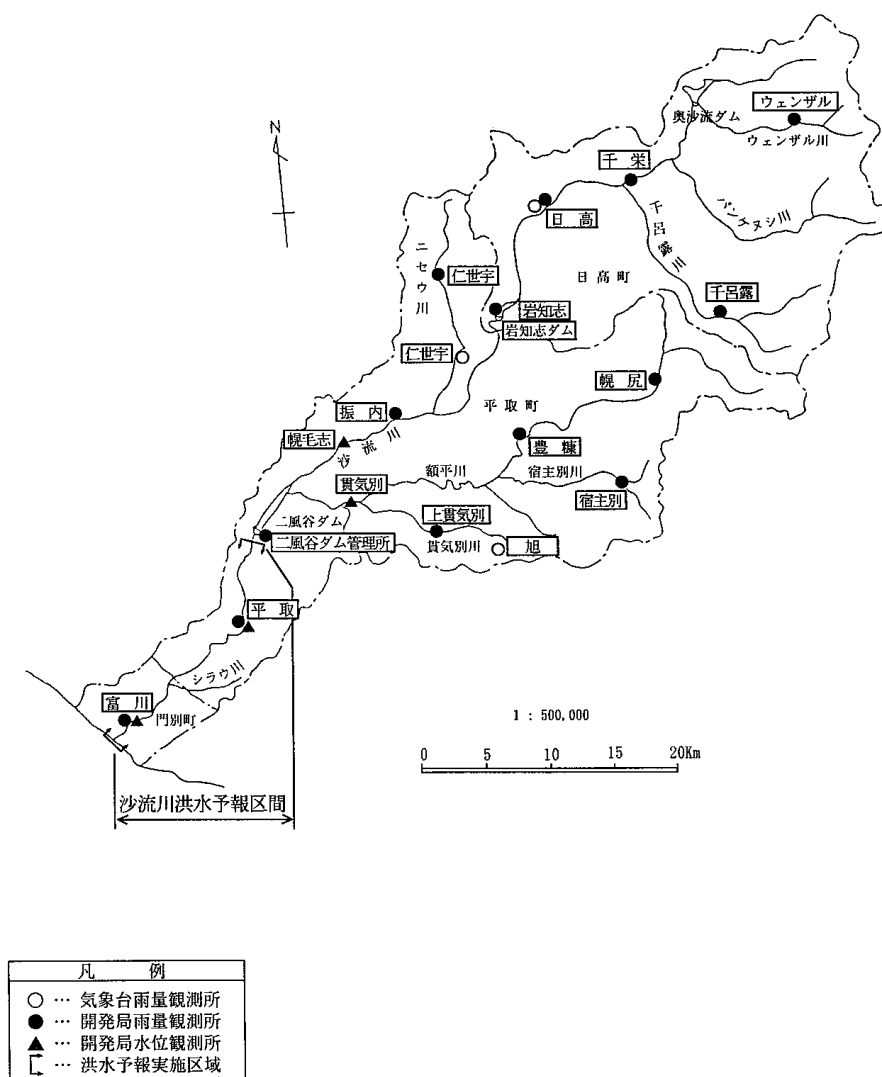


図 9-2 洪水予報区間及び雨量・水位観測所

9-4 危機管理への取り組み

(1) 水防連絡協議会との連携

洪水・高潮等による被害発生の防止または軽減をおこなうため、国及び地方自治体の関係機関が連携し、住民の避難、水防活動等を迅速かつ円滑におこなうために、水防連絡協議会が結成されている。この協議会により、重要水防箇所の合同巡視、水防団、水防資材の整備状況の把握、定期的な水防訓練等をおこなっている。



鷗川・沙流川水防演習の状況
(平成 16 年度鷗川・沙流川水防技術講習会)

(2) 水質事故対策の実施

油類や有害物質が河川に流出する水質事故は、流域内に生息する魚類や生態系のみならず、水利用者にも多大な被害を与えている。水質事故が発生した場合、その被害を最小限にとどめるため、迅速で適切な対応が必要になっている。このため、環境保全連絡協議会により、連絡体制を強化するとともに、水質事故訓練等をおこない迅速な対応をおこなうことが大切であり、また、水質事故に備え、常時から資機材の備蓄をおこなっている。



水質事故に対する取り組み
(平成 16 年度油流出事故対策現地訓練より～鵜川～)

(3) 洪水危機管理の取り組み

洪水危機管理において、平常時から危機管理に対する意識の形成を図るとともに、洪水発生時の被害を最小限に抑えるため、浸水想定区域図を公表するとともに水防計画・避難計画の策定の支援、土地利用計画との調整を関係機関や地域住民等と連携して推進している。

9-5 地域との連携

沙流川流域では、沙流川に沿って町が連なっており、沙流川を中心に各地域間での街づくりの連携が進められている。

流域内では、沙流川河口環境検討会、沙流川環境保全検討会等が設置され、北海道開発局室蘭開発建設部が主体となり、今後の川のあるべき姿や、川づくりのあり方について、地元漁業者、学識経験者、関係行政機関等との意見交換が行われている。

表 9-1 流域内における協議会及び検討会の内容

協議会及び検討会名	構成主体	目的
沙流川河口環境検討会	地元漁業者 学識経験者 河川管理者	沙流川の流水や土砂動態等により河口部や漁場を含む海域の形成について科学的に検討を行い、治水と河川・海域環境が調和した河口域を形成する手法のとりまとめを行う。
沙流川環境保全検討会	関係行政機関 河川管理者	沙流川の河川環境及びこれと密接に係わる流域の環境の保全のために必要な検討を行う。

一方、今後、流域のまちづくり事業と連携し、河川を地域レクリエーション、防災、まちづくりの拠点として位置づけ、地域と一体となった河川管理をおこなうことが必要とされている。地域住民と協力して河川管理を進めるためには、インターネット等のメディアを利用するなどして、地域住民に様々な河川情報を発信するとともに、地域からの河川整備に対する要望等を集約し、住民参加型の管理体制を構築する必要がある。また、河川清掃や、節水・水の再利用などを通じて、地域の人々の河川に対する愛護精神を啓発していくことも重要である。